「宇宙哲学とUFO」改題

# UFO contactee

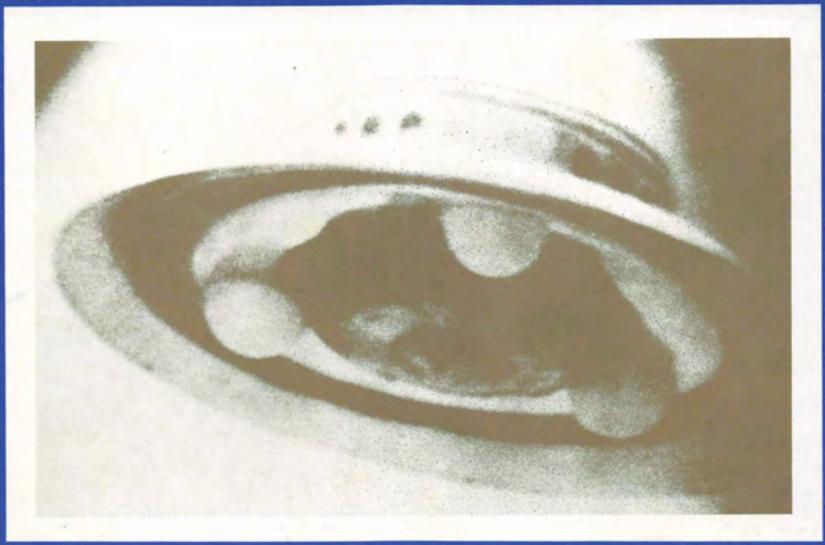
GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFOと宇宙哲学の専門誌

WINTER
1983

83

NASAは真相を隠していた!
人体オーラと人間の発達度
転生とカルマ
〈UFO目撃報告〉
異星人イエスの大地へ



## UFO contactee 第83号目次


〈巻頭言〉真実と隠蔽 ―― 1

**NASAは真相を隠していた！** ―― ウィリアム. L. ブライアン 2

人体オーラと人間の発達度 ―― 遠藤昭則 10

転生とカルマ(2) ―― 久保田八郎 16

〈UFO目撃報告〉UFO CONTACT

- 十字を描くUFO ―― 筒井　徹 21
- 夜空に巨大な母船？ ―― 南野孝夫 21
- 私のUFO目撃と予知体験 ―― 浜田靖子 22

**異星人イエスの大地へ** ―― 久保田八郎 24

イスラエルの旅の思い出 ―― 参加者有志 33

〈報告〉大阪支部大会・秋田支部大会 ―― 36

読者の声「コズミック・ポスト」 ―― 37

〈予告〉福岡支部大会 ―― 38

〈広告〉アダムスキー全集／59年度第２次「エルサレム宇宙考古学の旅」 ―― 39

日本GAP全国月例研究会案内 ―― 40

## GAPとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がＵＦＯの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本ＧＡＰの目的はＵＦＯとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙写真はジョージ＝アダムスキー撮影の金星のスカウト・シップ(円盤)。詳細はアダムスキー全集第１巻「宇宙からの訪問者」（文久書林刊）を参照。


★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

〈巻頭言〉

# 真実と隠蔽

アメリカから『ムーンゲート』と題する本が出た。NASA（米航空宇宙局）が探知して隠している月に関する驚異的真相を、綿密な証拠の蒐集、徹底した科学的分析、透徹した論理などにより暴露したもので、この書名はかつて世界を震撼させたウォーターゲート事件にひっかけてある。

著者のブライアン氏は一九七〇年にオレゴン州立大学の原子工学科を卒業して学士号を取得し、一九七六年には同大学ポートランド校で経営管理の学士号を取った。以来、民間産業で文筆関係の仕事をしてきた科学ジャーナリストで、数学にすぐれている新進気鋭の若い研究家である。

NASAが隠蔽策を常套手段としているというのは編者の持論だが、厳重な緘口令のしかれたアメリカの宇宙開発計画といえども、所詮は人間の集団なるがゆえに隠そうとしても真相は少しずつ洩れるのだろう。その洩れた部分を突破口として徹底的に究明したブライアン氏の執念には驚くべきものがある。

もっと驚くべき事は、月の引力は地球のそれの六分の一というのが定説であったのだが、NASAが全くありきたりの発表と巧妙なスローモーション画像により、月探査の結果、その定説どおりであったと思わせることにまんまと成功し、世界の四十五億の人間がそれを信じきっているという実状である。ブライアン氏の言う十分の七が事実とすれば、その事実よりも人間の盲信性に考えさせられるものがある。

これで思い出すのは太平洋戦争中の日本軍部の〝大本営発表〟なるものだ。戦争末期、日本軍の大敗をひた隠しにして、連戦連勝の大ラッパを吹き鳴らし、全日本国民に確実に勝っていると信じ込ませた有名な歴史的事実はすでに風化しつつある。悲惨な沖縄戦などについても当時の国民は真相を知らされなかったし、台湾沖航空戦に至ってはやはり大本営によって惨敗が大勝とすり替えられ、これを祝う景気づけの流行歌も出た。結局、太平洋戦争なるものが国民に対するごまかしの戦争であったことは戦後に判明して国民は唖然とした。戦後のラジオ番組である〝真相箱〟がこれで活躍した。こうして、軍隊にかり出されて青春を失った大正生まれは、真相究明や疑惑の解明という面で相当な感覚を身につけることができたのはせめてもの幸いであった。

戦後まもない大混乱期に九大生体解剖事件が発生した。戦時中、九大医学部でアメリカ兵の捕虜を生きたまま解剖したこの事件は当初極秘にされていたのだが（遠藤周作氏により『海と毒薬』と題して小説化されている）、明るみに出る前に編者は郷里でこのことを聞かされて慄然としたことがある。これが米軍に知れたら関係者は絞首刑にされるだろうと相手は言っていた（そして、後に判決はそのとおりになった）。なぜこんな大事件が事前に島根の一青年の耳にはいったのか、理由はわからないが、「隠されている事で洩らされないものはない」というイエスの言葉が身にしみるのである。

アダムスキー問題も世上忘却の彼方に押しやられたかのように見えるが、そうではない。地元のアメリカでブライアンという勇士が出現して問題を引っ張り戻した上、敢然とNASAに挑戦したのだ。危険に満ちたアメリカの国情を考えると、これには相当な勇気を要するだろう。これが世界の大勢にどれだけの影響を与えるかはわからぬが、警醒の一石にはなるだろう。

イエスの教えは三一三年にローマ帝国コンスタンティヌス帝のミラノ勅令により国教として公認されるまでに三百年もかかったが、アダムスキー問題も緩慢ながら次第に認められる方向に動いて、いつかは世界で〝公認〟される日が来るだろう。情報化の現代では三百年もかからぬだろう。

ここで信念という問題が浮上してくる。人間の心はきわめて脆弱なので、いっときある物事に強烈な関心があっても、いつのまにか失ってしまう。この原因の一つに、心が他からの騒音によって惑乱されるという作用がある。「あんなものはインチキだよ」と、実際にはそれに関して何も知らぬ人がおごそかな口調で発言すると、とたんに疑惑の影が忍び寄る。

先般他界したある高名な歴史学者が、UFOなどは徹底したバカげたもので、こんな物が存在するわけがないと、ある雑誌であしざまに罵倒していたことがある。だがその学者がUFO関係の図書を丹念に読み、自ら調査した事実はない。UFO好きな中学生程度の知識もない学者の独断や偏見に惑わされてはならない。

人間にはビリーフ（信ずること）の自由がある。だれが何を信じようと信じまいと全く一個人の意志次第である。他人の研究テーマを頭ごなしに否定してかかるのは学問的ではないし科学的態度でもない。批判が可能なのは研究結果の出た段階である。

一般的に言っていわゆるUFO問題にはまだ結果が出ていないし、解明されないまま謎に包まれているということになっている。この謎の物体に熱烈な関心を寄せてまじめに研究する人ならば、それが中学生であっても他から干渉するべきではあるまい。むしろあたたかい目で見るべきだろう。

UFO研究界自体もいまは騒然たる状態だが、いずれは結論が出るだろう。それまでは黙々として研究を続けるに越したことはない。特にアダムスキー問題に関しては雑音に惑わされることなく、ひたすらに信念という武器を駆使して地道に正道を歩むことが望ましい。アダムスキー研究は雑音との戦いでもあるが、心の内部に忍び込もうとする〝疑惑の神〟との戦いでもある。そのためには雑多な低次元なUFO関係書は読まぬほうがよいだろう。特に他のコンタクティーを名ざしでののしるようなコンタクティーは本物とはいえないから注意を要する。

■翻訳連載権独占■ アダムスキーの体験は実証された

MOONGATE By William L. Brian ウィリアム・L・ブライアン／久保田八郎訳

# NASAは真相を隠していた！

〈連載第1回〉

アメリカの科学技術者ブライアンの著書「ムーンゲート」がいま世界のUFO研究界に大きな衝撃を与えている。アポロ宇宙飛行士の月面探査で月の引力その他に関して驚異的な事実が発見されたにもかかわらず、NASA（米航空宇宙局）がひた隠しにしていることを科学的な徹底分析により暴露したのだ。そしてジョージ・アダムスキーが『宇宙からの訪問者』で月面や宇宙空間に関して述べた体験が真実であることを同書第11章で詳細に説いてアダムスキーの業績を讃えている。

この記事は同書の内、重要な部分である第10章と11章を訳出したものである。

なお次の〝献辞〟は同書の冒頭に掲げられたもので、題名の「ムーンゲート」は世界を震撼させたウォーターゲート事件にひっかけてある。

## 献辞

本書は次の各グループと個人に捧げられたものである。

知ってか知らずか当局の隠蔽をさまたげた宇宙飛行士と宇宙開発関係者。

不当な嘲笑をこうむりながらも勇気をもって大衆に自己の体験を知らせたジョージ・アダムスキー、ハワード・メンジール、その他の人々。

自己の素晴らしい発見を明るみに出そうとして科学界の現状とたたかったイマヌエル・ベリコフスキー、カール・フォン・ライヒェンバッハ男爵、ヴィルヘルム・ライヒ、その他の人々。

本書の原稿をタイプに打ち、編集に際して広範囲に援助してくれたベス・ブライアン。

真実を尊重する支持者と援助者すべての方々。

## 第10章 宇宙開発計画に異星人が干渉した証拠

UFO問題は多くの文筆家によって乱暴に扱われてきた。彼らは見たところたいした考えもなく厳密な分析もしないでUFOに関する本を書いている。したがって本書（ムーンゲート）の他の部分で述べられている情報がもっと論理的にUFOの謎の面を説明するのに役立つことを願うものである。

これには宇宙の働きと宇宙における人間の位置をよく理解してかかることが必要である。あらゆる現象はそれがどんなに奇怪に見えても合理的な基礎を持っているにちがいないのだ。いかなる場合でも原因と結果の法則が適用されねばならない。もしNASA（米航空宇宙局）が情報をでっちあげたとすれば、それは他の確実な根拠のある事件と矛盾する場合にでっちあげとして浮かび上がるだろう。あらゆる現象を総計すれば結局は発生した出来事の真の姿になるにちがいない。

理屈からすれば、もし知的生物の乗ったUFOが近くにいるのなら、それは地球へ来るのに何かの目的を持つにちがいないということになる。この生物がまわりにいるとすれば、地球人が起こす行動は彼らによって密接に監視されるだろう。地球の表面に住んでいる人類は殺人者として極端な悪評をこうむっている。歴史家はあれやこれやの理由にもとづいて戦争を合理化することはできるが、地球表面の一部ではない別な進歩した文明の見地からすれば、地球の歴史はゾッとする

ようなものだろう。こうした国々が戦争に満ちた歴史を持ち、ますます強力になる武器を開発しているというのに、いったいUFOの乗員が地球の各国を善意に満ちた国として信用するだろうか。

宇宙人からコンタクトされたと主張する地球人に関する莫大な情報が存在している。これらのコンタクティー（宇宙人に会ったと称する人）の多くは、地球は注意深く監視されていると伝えられたと言っている。この監視の根本的な理由は、もし核戦争が始まれば彼らは急速にそれを阻止できるということにある。これが真実だとすれば、ミサイルや宇宙船は密接に観察されて、それらが核弾頭を運んでいないことや、地球や月に損傷を与えないことなどを確かめるだろう。

したがってUFOとの遭遇や目撃が宇宙飛行士によってなされたとしても驚くにはあたらない。このUFOなるものが月面に配置されているとすれば、アポロ宇宙船の飛行中は特にそうだろう。

この記事はNASAや他の月観測者がうっかり流した異星人存在の証拠に焦点をあてるものである。コンタクティーの異星人との遭遇は次章で述べることにしよう。

## 月面の謎のドーム群

数世紀昔、月の観測者たちは自然の原因だとは簡単に片づけられない一時的な現象に注目した。たとえば小さなドーム状の隆起物が月面に現れたり消えたりした。一七八八年には天文学者のシュレーターがこれらのドームは〝月人〟の産業活動のせいだと言ったが、当然のことながら彼の説はまじめに取り上げられなかった。しかしこのような白く丸いドームが二百以上も現代において観測され分類されてきたのである。これらの半球型物体は直径が二百メートルから四百メートルまでさまざまあり、同じような大きさの二十個ないし三十個がティコ・クレーターの平面に密集しているのが見られた。これらの特殊なドームは丸い丘だとか火山の隆起などのせいにはできない。その予想のできない出現や消滅は、それらが知的に作られ、可動性の構造物であることを示している。

シュレーターは一七八八年に月のアルプスに一つの影を見た。最初彼は一点の光を見たのだが、その地域が照らされたあと、光のともった場所に一つの丸い影が現れたのである。影が丸かったからには、その影を作り出した物体は月の地表から離れていたのだ。

十五分後にそれは消えたと思われた。シュレーターがある大きな飛行物体を見て、それが自身の影を作るような照明をやったということはあり得ることである。その他にも多くの輝く丸い物体がプラトン・クレーターなどの内部や危機の海にも目撃されている。それらはしばしばドーム状で現れているし、夜によっては輝きが変化している。

ジョージ・レナードは著書 Somebody Else is on the Moon（月面には他のだれかがいる）の中で、月には巨大な機械が働いているという証拠を写真で示している。彼の示唆によると、かつて月の表面に加えられた損傷がゆっくりと修理されているのだという。そしてクレーター（複数）で仕事が行われており、たぶん鉱石の発掘と思われる光景の写真による証拠を持っていると称している。月には多くの目的に用いられる価値のある元素類に満ちていることが現在知られているのだ。

## 宇宙飛行士が目撃したUFO

アメリカの宇宙開発を異星人が監視しているという証拠は、どうやらマーキュリー計画で始まり、アポロ17号まで続いたようだ。一九六三年にクーパーが（マーキュリー9号で）ハワイ上空の四回目の軌道を飛んでいたあいだ、理解しがたい言葉を用いた奇怪な声による交信を聴いた。この録音テープはあとで分析されたが、その音声は地球上で知られているいかなる外国語でもないという結論に達したのである。

オーストラリア付近の最後の軌道を飛んでいるとき、彼は自分の宇宙船から一機のUFOを目撃したが、それは追跡ステーションにいた二百名を超える人々も見たといわれている。

一機またはそれ以上のUFOがジェミニ12号の飛行中に見られたことがあるという。一九六六年にジェミニ9号の打ち上げが無線連絡の妨害により延期になったあと、NASAは、UFOまたは未知の物体が数度の機会に宇宙飛行士によって見られたとテレビで声明した。

ホワイトとマクディビットは彼らの乗った宇宙船（ジェミニ4号）の上下を移動したタマゴ型の銀色に輝く物体を見て写真に撮影した。物体が近くを飛ぶときにムービーカメラで五カット撮影されたが、それには扇風機のような輝きと、長い光の尾をともなったタマゴ型の物体が写っている。飛行コントロール報告によると、司令のジム・マクディビットは大きな腕が数本突き出ているように見える別な物体を宇宙空間に見たと報告したという。またその報告書には彼がその物体の映画を撮影したけれども、太陽のために困難だったと述べてある。

ジェミニ7号がその近くを飛ぶ一機のUFOと多くの小さな粒子に遭遇したことは重大である。その銀色のUFOはロケットのブースターではない。ブースターはUFOとは別な位置に見られたからだ。NASAは、他の宇宙飛行などにも見られたこの粒子を船外に放出された小便の水滴、または船体からはげ落ちた塗料のせいだとありふれた声明をした。

## グレン中佐の〝ホタル火〟

ジョン・グレンは宇宙の〝ホタル火〟を発見した最初の宇宙飛行士だが、これは宇宙開発でたいへん頻繁に見られたものである。彼は最初の軌道の夜の側から脱け出たあと、窓から外を振り返って、〝星々〟が見えたために自分の船体がひっくり返ったと思った。しかし彼は自分の宇宙船がひっくり返ったのではなく、〝ホタル火〟のように見える黄緑色の光

る粒子で囲まれていることにすぐ気づいたのである。それらは大きさがさまざまで、ピンの頭ぐらいから一インチの八分の三ぐらいまであり、互いに二・五メートルから三メートル離れており、船体周囲の空間に一様に散らばっていた。太陽が出てくるたびにグレンは約四分間その粒子群を観察した。それについて彼は次のように述べている。

「三度目の日の出のあいだに私は船体をまわして、その粒子群がどこから来るのかを見きわめようとして前方に顔を向けた。前方を見つめながら私が太陽を背にしたときに、約一〇パーセントだけの粒子を見ることができたが、それでも粒子群はどこかから私の方へやって来るように見えた。だからそれは船体から出たものではないように思われた。この粒子群の正体が何であるかはなおも議論の余地があり、今後の解明を待っている」

この粒子群が彼の船体から出たものではないとグレンははっきり言っているにもかかわらず、オーソドックスの権威者たちはそれをカプセルからはげ落ちた物質の断片のせいにしたのである。

ジェミニの宇宙飛行にはまだ多くのUFO目撃があるのだが、最も価値のある情報はアポロの月飛行から出た。月を回る飛行でアポロ8号は〝円盤〟型の物体を見たというし、〝目のくらむような光〟を体験し、〝耐えられないような高周波の音〟を無線機から聴いたという。その後飛行士たちはもっと強烈に光る物体を再度見たし、〝宇宙船内の熱波〟を体験した。そして船体がぐらぐら揺れ始めたけれども、やがてコントロールをとり直した。船体が月の東側の縁にさしかかったとき、船体の冷却装置のラジエーターの水が蒸発してしまったので、補給する必要があったというのも重大問題である！

## アポロ飛行士たちのUFO遭遇事件

当局の説明によると、サーナンとスタッフォードがアポロ11号の着陸予定地点を調べるために月面から一万五千メートル以内に降下したとき、アポロ10号は危機一発で難をまのがれた。下降段が投棄されたあと、上昇段はひどいスピン運動にはいり、上下に縦揺れを起こしたのだ。何かの理由でジャイロ誘導装置がコントロールを失ったので、船体が安定するようにスタッフォードは手動操縦に切りかえた。これはコントロールスイッチが技術者たちによって間違った位置におかれていて、スタッフォードはそれに気づかなかったと思われているが、しかしそのとき一機のUFOが下方から垂直に上昇して、しかもそれが写真に撮影されたということは当局の説明に述べてない。

アポロ11号による最初のUFOとの遭遇は飛行中のある日に発生した。宇宙飛行士たちは一個の未知の物体を目撃したが、それは船体と月とのあいだに現れた。ブースターロケットかもしれなかった。

帰還後の報告でオルドリンは、UFO目撃とほぼ同じ頃に上昇でトラブルが生じたことを一同が思い出したと述べた。コリンズはみんなが動揺を感じたと言い、アームストロングはコリンズが機械船が離れたのではないかと思ったと言った。するとオルドリンがあらゆる種類の小物体群が飛んで行ってから、L字型のもっと輝く物体を見たと述べた。アームストロングはそれを開いたスーツケースのようだと語り、みんなはシリンダーのような形をしたものを見たのだと、あとでオルドリンが話した。アームストロングは二個の連結した輪にたとえたが、オルドリンはそれを否定し、中空のシリンダーのようだと述べた。するとコリンズがまた口をはさんで、それは回転している中空のシリンダーのように見えたが、開いた書物のような形に変化したと断言した。

右の会話にはまだ重要な情報がある。まず第一に、オルドリンはUFO目撃の頃に上昇でトラブルがあったと言っている。コリンズは、一同がドスンという衝撃を感じたけれども、アームストロングが機械船のことに言及したあとでこの考え方には反対をとなえた。

会話が進むにつれて宇宙飛行士たちはその物体の形について話し始めた。どうやらこの三人の訓練された観測者たちは、自分たちの見た物について意見が一致しないようだった。各人がその物体が何であるかについて心像を持っているらしいが、コリンズがそれをシリンダーだと率直に話したあとで、オルドリンはシリンダーではないと言う。アームストロングは二個の連結した輪のように見えたと言っている。

## クレーターに並ぶUFO群！

アポロ11号が月の近くに来たとき、気味の悪い無線の雑音が流れてきた。消防車のサイレン、電動丸鋸、汽車の汽笛みたいに響くのだ。管制センターは他のだれかが一緒にいるのではないかと尋ねたらしい。だがこの信号またはノイズは船体の外から来たもので、宇宙飛行にはいってから最初の数日間、断続的に続いたものだという。

ある秘密の情報源によると、アームストロングとオルドリンが月面に着陸した後、巨大なUFO群がクレーターの向こう側にずらりと並んで飛行士たちを監視していたという。この事件に関する別な記事が『ナショナル・エンクァイアラー』誌の一九七九年九月十一日号に出ていた。この記事の中でNASAの元コンサルタントが、この事件は実際に発生したことなのだが秘密にされたのだと主張している。その記事によると、月面でのUFO出現はNASAではだれ知らぬ者はないという。

読者は、この情報には隠されている部分があることに気づいて、NASA関係者のUFO目撃の話題に関してはたぶん疑惑が起こるだろう。もしこの記事が好きなように評価されるとすれば、この事件はどのようにしても完全に証明はされないだろう。しかし残っているすべての証拠と、これに先立って出てきた証拠のすべてに関連して考えれば、この事件はむしろ信じられるのである。

## アポロ12号を追う二個の物体

アポロ12号は打ち上げ後まもなく完全な電気系統の故障を体験した。船体は打ち上げられてから三十六秒後と五十二秒後にカミナリに打たれたように思われた。しかしその空域には雷雨はなかったので、その事故は別な見地から調べる必要があった。

人々のなかには次のように推測したのもある。つまりロケットがイオン化した排気から地上に電気の導体をつくり出して、船体を通じていなずまが放電したというのだ。しかしある情報源の主張によると、ヨーロッパの観測所（複数）は、12号の船体が月に向かっていたとき、その付近に二個の未知の物体を見たと報告したという。

一個の物体はアポロ12号のあとに従っているようで、他の一個はアポロの前方にいた。両方とも急速に点滅していた。

翌日宇宙飛行士たちは二機のUFOすなわち妖怪（ばけ）が二十一万キロのあたりで出現したと報告した。そして管制センターとの交信中に物体の一個が急スピードで飛び去ったのである。アポロ12号が月に接近するにつれて不思議な音が管制センターにキャッチされたという。それはアポロ12号から発したものではなく、別な場所から来たものであった。その音は宇宙飛行士にも聞かれたらしい。空電またはホイッスルのような音で、連続した音だった。

## ホタル火微粒子はUFOの影響？

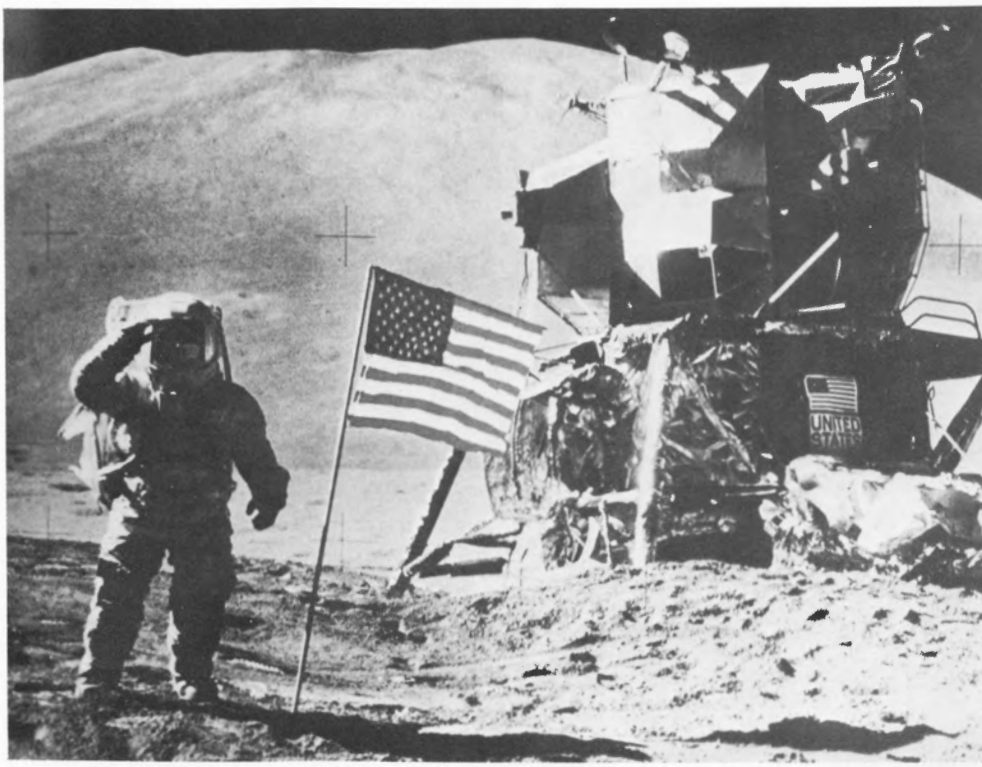
ホタル火の件も本書で何度かとりあげてきた。アポロ16号の宇宙飛行士が月に向かって航行していたとき、このような粒子の充満している空域へ突入したのである。しかしNASAは、それは太陽光の過熱から船体を守るために塗ってある塗料の剝（は）片だと主張している。しかしまたもこの現象にともなってマティングリーは誘導と航行装置にトラブルが発生したと報告しているのだ。姿勢の表示器は作動しなかったし、ジンバル（常平架）の台はロックされていたのだ。手動による再調整が必要となり、船体とともに進行していた〝雪片〟の群れは星を見るのを妨げた。基本的に言って何が起こったのかはだれにもわからないのだ。ともかくも過渡電流が電気回路に流れて、このため一時的な機能不全におちいったのだが、後に消滅した。

アポロ16号が降下する前に、メーンロケットのエンジンをコントロールする操縦装置の回路に故障が生じ、このためにエンジンのベル（広がった口の部分）が横揺れを起こした。

宇宙飛行中の電気系統の故障、UFO目撃、光る微小物体などはみな関連した現象であるように思われる。この関連状況を調べてみると、実際に宇宙飛行士に起こったかもしれない出来事について莫大な情報が与えられるのである。

ジョン・グレンは軌道を回って太陽光のもとに来るたびに約四分間光る微小物体群を見ている。その物体群は遠くから船体の方へやって来たと彼は明確に述べた。グレンは太陽によって絶えず放射されている何かの微粒子の分解を見ていた（9頁より）原著者ブライアン氏は、これが誤りで実は地球の引力の十分の七であることをNASAは探知したけれどもこれをも極秘にしていると述べた上、アポロ飛行士の活動の厳密な分析により、かつて世界中の茶の間のテレビに流されたフワーッ、フワーッと空（くう）を飛ぶような月面での飛行士の歩行ぶりは、NASAがわざとスローモーションにして放送したのだと言っている。このとてつもなく興味深い記事は逐次本誌に連載の予定なので期待されたい。

▼アポロ15号のアーウィン宇宙飛行士。右は着陸船ファルコン。



とも思われた。集まった証拠は、その微粒子は惑星や銀河系などのあいだに充満し、その成分をなす粒子はたぶん光の光子から成り立っているらしいことを示している。この微粒子が分解するとき光子が放出されるのだ。この微粒子の性質は宇宙飛行士が目撃したというUFO（複数）の推進に用いられるエネルギーと密接な関係があるのかもしれない。

UFO（複数）がNASAの宇宙船に接近して来たとき、この〝ホタル火〟微粒子がすさまじく増えたのだろう。この微粒子は電気を帯びるらしく、宇宙船の材質を急速に貫通するようだ。これらが宇宙空間の物質や他の微粒子と相互に影響し合うときに分解するとすれば、宇宙飛行士は船体の内外でそれを見るだろう。船体におよぼすこの微粒子の影響により、電気系統がオーバーロード（負担をかけすぎること）になり、無線機の回路に電気的なノイズを起こすことになるのだろう。その微粒子はUFOによって高度な集中状態で放射されるのであろうから、付近にいる物体はそれを充分に浴びることになり、それがオーバーロードと短絡を起こすのだろう。たとえばアポロ10号の誘導装置は接近して来るUFOから放射されるこの微粒子によって短絡したのかもしれない。

## UFOのエネルギー・フィールドの干渉

アポロ8号の飛行士が体験したという内部の熱もこの微粒子の影響かもしれない。もしUFOがアポロ8号のカプセルに接近したのなら、この微粒子の高度な集中状態が船体を貫通してひどい熱を放ったのだろう。奇妙な無電ノイズや風変わりなUFOの行動は、放射された電子のせいだとも考えられる。アポロ8号のラジエーターの水の減少もUFOのエネルギー・フィールドが原因かもしれない。なぜならこれと同じ透過性の荷電粒子が容易に蒸発現象を起こすことがあるからだ。UFOの超接近によりラジエーターの水が急速に沸騰して減ったのかもしれない。

アポロ11号が月へ向かって飛行中にUFOを目撃したとき、飛行士たちは上昇するときにトラブルが発生したとオルドリンが帰還報告で述べた。これは他の事件（複数）と同じパタンである。つまりUFOのエネルギー・フィールドが明らかに無電の干渉をやったのだ。コリンズは一同がドスンという衝撃を感じたと主張している。これは船体がこの粒子の高度な集中状態に接したとすれば起こることなのかもしれない。この例では光る粒子について何も言及されなかったけれども、宇宙飛行士たちは観察したにちがいない。無電のノイズが宇宙飛行の最初の数日間に断続的に聞かれたからには、UFO（複数）はこの飛行中に接近していたのだろう。

カミナリのせいだとされたアポロ12号の電気系統のトラブルも、付近にいたというUFOによってひき起こされたのかもしれない。地上の複数の観測所がUFOの点滅を確認したとすれば、宇宙飛行士と管制センターが連続音をキャッチしても驚くにはあたらない。いかなる原因でUFOが明滅したにしても、その電波エネルギーの放射を宇宙船カプセルが受けたのだろう。

## 船体の塗料が剝げたとは！

アポロ16号の月飛行のあいだに宇宙飛行士たちは前述の〝ホタル火〟すなわち光る粒子が群らがった空域に突入した。これを塗料の細片だというNASAの説明はおそらく真相を隠そうとする相変わらずの策謀であろう。この塗料が船体をオーバーヒートから保護することになっていながら、しかも飛行の初期に剝げ落ちたというのなら、いかがわしい技術を意味することになる。これと同じ言い訳がジョン・グレンの軌道飛行中のホタル火にもなされたので、十年近くものあいだ改良はなされなかったことになる。要するに塗料の細片説はこの現象にたいする粗末な説明になるだけだ。

UFOが接近したときにはいつも塗料が剝げ落ちたりする理由や、電気系統の欠陥やその他の障害も同時に発生する理由などをNASAはあえて説明はしなかった。

またアポロ16号は〝塗料〟のトラブルを体験すると同時に、誘導装置のトラブルも起こった。UFOのエネルギー・フィールドがきわめて激烈であったために、それが船体の姿勢を制御するのに必要な〝星〟の観測を妨害したので、かわりに太陽が利用されたのである。電子器機の欠陥が月飛行のほとんどにわたって発生したらしいことを考えれば、UFOは気味が悪くなるほど接近したにちがいない。

月探査機が体験したトラブルのいくつかは、右と同じエネルギー源から起こったと思われるのである。多くの月探査機がどうやらUFOにいじられたらしい、と思われるほどの不思議な故障が起こっている。たとえば、一九七一年二月から一九七五年三月までずっと作動していたアポロ14号の地震計にトラブルが発生したことがある。無線の受信機は一九七五年三月にだめになり、翌年一月十八日には送信機がストップした。ところが謎が発生した。約一カ月後の一九七六年二月十九日に受信機と送信機の両方が作動し始めたのだ。おまけに日中は全然作動しなかった他の器械類の一つが、夜も昼も完全に作動を始めたのである。すると約一カ月後には地震計全体が全く機能を停止してしまった。

UFOの乗員がアメリカの宇宙開発を監視し、おそらくそれに干渉しているという証拠は沢山ある。それはNASAと軍部による隠蔽策の長い一覧表に載っている一項目を意味するものだ。読者は詳細な補足やここではとりあげなかったUFOとの遭遇事件類の関係資料をぜひとも追求されたい。

次の章ではUFOコンタクティーから与えられた月に関する情報を検討し、すでに述べた事柄と比較しよう。真実を見い出そうとするのなら入手できる証拠のすべてを調査しなければならない。

# 第11章 コンタクティーと、月に関する発見物

## アダムスキーのコンタクト

ジョージ・アダムスキーは一九五三年にデスモンド・レスリーとの共著で、『空飛ぶ円盤は着陸した』を書いた。これは歴史上のUFO目撃事件と、アダムスキーがUFOコンタクティーとして最初に持った体験を収めたものである。一九五五年にはアダムスキーの別な著書、『宇宙船の内部』が出たが、これはその後に発生したUFOとその乗員たちとの会見について述べた書である。以下の記事は右の二冊の書物の要約である。

（訳注＝第一著のアダムスキーが書いた部分と第二著全部の合本日本語訳版が、『宇宙からの訪問者』という題でアダムスキー全集第一巻として文久書林より出ている）

アダムスキーは米カリフォルニア州パロマー・ガーデンズに住んでいたアマチュア天文家であった。一九四六年（昭和二十一年）に彼は自宅付近の山（パロマー山）の尾根の上空に停止している巨大な宇宙船を目撃し、このため彼は定期的なUFOの観測にかなりの時間をついやすようになった。

一九四七年八月に、彼と四人の観測者は約一時間のうちに百八十四機のUFOが空中を横切って飛ぶのをかぞえたのである。この時期に発生した非常に多くの目撃とアダムスキーの名声のために、軍部の人たちが「自身の望遠鏡でUFOを撮影してくれ」と彼に依頼したという。一九五一年までには五百枚以上のUFO写真を撮影することに成功し、その仕事でUFO研究界ではすっかり有名になった。

各種の報告によれば、多数の円盤が米西部の東寄りの砂漠地帯に着陸しつつあるということだったので、もっと近接したコンタクトをしようとして、彼は一九五一年と五二年に砂漠地帯へ多くの旅をした。

一九五二年十一月二十日、デザート・センター（地名）からアリゾナ州パーカー寄り十・二マイルの所で彼は一機の円盤とそのパイロットと最初のコンタクトを行ったのである。その円盤は着地した（訳注＝厳密に言えば地上数フィートの空間に浮かび、円型翼の一部分のみが小さな丘に接触していた）、そして一人の人間がまもなく現れて、アダムスキーに「こちらへ来い」と手招きした。そして二人の会話で、相手の男は「われわれが地球へ来る目的の一つは核爆弾と放射性降下物に関係がある」と暗示した。

この小型機を目撃する前に、アダムスキーと他の三名の仲間はもっと大きな円筒型の宇宙船を見ていたのである（訳注＝三名ではなく実際は六名）。宇宙から来た訪問者は、小型機はその大きな宇宙船から降下したことをほのめかした。アダムスキーの三名の仲間はそのとき遠くに離れていて、会見が終わったときに彼が一同に合図をするのを待っていた。彼は、コンタクトが行われることになったら、一人だけがコンタクトするのが最上であろうと判断していたので、友人たちは別な場所で待っていたのである。

この最初の会見でアダムスキーは円盤には入らなかったが、外側からそれを注意深く観察することができた。目撃後一時間もたたないうちに宇宙から来た訪問者は行かねばならないと言い、それから円盤は離陸した。そこでアダムスキーは仲間に合図をした。彼らは訪問者の奇妙な足跡のスケッチをしたり石膏をとったりした。そして彼らはあとで『フェニックス・ガゼット』紙にその事件について報告したのである。

十二月十三日、一機の小型円盤が彼の家の上空に停止したので、彼はその写真を撮り続けた。円盤は三十メートル以内に接近して、先の会見時にアダムスキーが相手の男に渡しておいたフィルムホルダーが円盤の丸窓から落とされた。あとでフィルムを現像してみると、その一枚には記号のような文字によるメッセージが写し込まれていたのである。

## 円盤と大母船に乗せられる

アダムスキーはその後小型円盤に乗って、地球表面から一万二千メートル上空に停止していた母船に乗ることを許された。それは乗組員の一人によると直径四十五メートル、長さが六百メートルあるという。

中へ入ってから彼は長さ数マイルもあるもっと大きな母船の絵を見た。これは宇宙を旅する都市といえるものである。アダムスキーの乗った大母船は地球から八万キロの位置に出て行った。そして彼は丸窓の一つを通して見た光景を述べている。

彼は宇宙空間が完全に暗黒であることに気づいたけれども、しかし無数のホタル火が到る所にちらついていた。それらはあらゆる方向に動いており、多くの種類の色を帯びていて、まるで天空の巨大な花火大会ともいうべき光景であった。

異星人の案内によれば、その母船は電磁気といわれる自然界の力を応用したもので、常に途方もないパワーを持つという。この巨大なエネルギーは船体の外壁を透して短距離ながら空間に放射されるが、ときには数マイルも放射されることがある。このエネルギー・フィールドは保護物として作用し、絶えずパワーを放射しながら宇宙の粒子や岩屑などを跳ね返す。多くの話し合いの後にアダムスキーは小型のスカウト・シップ（円盤）に乗って家へ帰らされた。

二カ月後、アダムスキーは再びコンタクトし、今度は科学的な分析用に研究所として用いられる別な母船へ乗せられる。この母船内の異星人たちは、多くの小さな無人円盤は彼らの研究用の資料を集めるために用いられるのだと説明する。大気のサンプルが絶えず集められ、核爆弾の実験を示す危険な放射性物質にたいする監視がされる。アダムスキーは宇宙塵

の映像に関するテストの一つについて述べている。彼はスクリーンに絶えず微小な物質が渦巻くのを見る。微小物質がときどき現れては凝縮されて固体になり、次に消えて、ほとんど不可視な状態に返ってゆく。その構成物はときおり非常に希薄になるので、純粋なガスに変形するように見える。微粒子の固型化の構成とともに、ある量のエネルギーが可視的となり、固型化し、続いてすぐに爆発が生じて散乱するかまたは分解するのがスクリーンで見える。

別なグループの器械類は強度と構成を記録していた。他の粒子に反応するエネルギーと物質を含む物体の形成と崩壊のサイクルが絶えまなく続く。アダムスキーが気づいたのは、エネルギーが集積して平板状または雲のようなかたまりになると、それは空間でそれの近くにいるあらゆる物を妨げるということである。

彼は自分が全宇宙に遍満しているパワーを観察しているのだと信じた。このパワーから惑星や銀河系が形成されるのだ。しかもこのパワーが宇宙の生命体と活動とを支え、維持しているのである。異星人の案内者は、この同じパワーが宇宙空間で彼らの船体を推進させるのだとほのめかした。

## 月には大気、水、動植物、人間が存在する！

この特殊な訪問のあいだに宇宙船は月に接近して行き、アダムスキーの案内人が彼らの装置で示されるように月には大気があるのだと知らせる。そして空気というものは地球で言われているように他の天体を観測するのに通常は障害にはならないのだと語る。またときおり地球の科学者が見ている月面上空の雲の動く影についても話した。

さらに相手は、地球に面している側の月面にはごく薄い雲があるけれども、月の縁の向こう側の温暖な地域には地球の雲に似た厚い雲の活動を観測装置が示していると話す。相手は月のこちら側の面を地球の砂漠地帯にたとえて、温度は地球の科学者が信じているほどに暑くはないのだと言う。また、月の中心部には細長い土地があり、そこには植物、樹木、動物、人間などが存在していると述べた。

次にアダムスキーは母船の望遠鏡のような装置を用いて見た物を記述している。彼は地球人が月に関していかに誤った概念を持っているかを知って驚いた。クレーターの多くは山々で囲まれた大きな谷であることがわかった。そして月のこちら側にはかつて水が存在したにちがいないという確実な徴候を見ることができた。案内人は、月の裏側にはまだ多量の水があり、こちら側の山々の中には隠された多くの水があると語る。また彼はクレーターを囲む山脈の側面に大昔の水路の跡があることを指摘し、アダムスキーも水の激しい流出によってつくられたと思われる深いスジが地面に残っているのに気づいた。彼は植物さえも見たし、地表をこまかな粉状の砂漠地帯と述べ、一方、他の地域は粗い砂または小さな砂利のような少し大きな物質からできていると言っている。彼が見つめていると、小さな四つ足の毛の生えた動物が、彼が観察していた地面を横切って走った。

一九五四年八月二十三日にアダムスキーは月に向かって再度の宇宙旅行に連れて行かれた。今度は大きな宇宙船を格納するために建設された大格納庫群がクレーター（複数）の底にあるのを見せられる。そして月面に降りる人間はそこの空気に馴れるために体内の減圧処置を受けねばならないと聞かされる。これは高地にまつわる不快感と低い気圧から身を守るために必要らしい。

一同が月の反対側に到達すると、案内者は低い斜面に生えた大森林のある、雪に覆われた山々を指さす。彼らは山地の湖や、大きな湖に注いでいる川などを観察する。渓谷や山の斜面には多くの集落があり、かなり大きな都市もある。案内者の言うところによると、格納庫（ドーム）類は都市の近くに建てられているが、これは月の鉱物と交換するために運ばれてくる食料品を降ろすのに都合がよいからだ。

ここで読者は、アダムスキーの体験なるものは、宇宙飛行士が初めて月に着陸するよりも十五年も前に発生したことを思い出すだろう。アダムスキーが観察した信じがたいほどの事物は、別なコンタクティーの体験が明るみに出たあとで評価されるだろう。

（訳注‖続いて原書ではアメリカの昔のコンタクティーであるハワード・メンジールについて一頁分言及してあるが、紙面の都合によりここでは省略する。以上に関する詳細については『宇宙からの訪問者』（文久書林刊）を読まれたい）

## アダムスキーは真実を述べた

こうしたＵＦＯコンタクティーたちの体験や観察した事柄を、ここで他の証拠に照らして考察することにしよう。アダムスキーが最初に母船に乗り込んだとき、彼は地球から八万キロ離れた位置で母船の丸窓から宇宙空間を観察した。そして宇宙が完全な暗黒であることに気づいた。このことは第七章で述べたように、大気圏から上は肉眼で星を見ることは不可能だということを意味する。

またアダムスキーはホタル火現象を目撃し、ジョン・グレンが説明したのと同じように説明した。彼の宇宙旅行の話が真実でないというのなら、いったい彼はどのようにして一九五〇年代の初めにこれを発見することができたのか？　次のことに注目するのは重要である。すなわち宇宙空間におけるホタル火効果を〝塗料のかけら〟と説明したＮＡＳＡはおそらくでたらめを言っているのである。ＵＦＯは宇宙の岩屑や過熱から船体を保護するために塗料などを用いないだろう。アダムスキーが見たホタル火現象の激しさは、宇宙飛行士たちが見たホタル火現象よりもはるかに大きかったのだろう。彼が大母船の激烈なエネルギー・フィールドを通して宇宙空間を見ていたとすれば、これはうなずけるものがある。

次に案内者はアダムスキーが理解できるような言葉で、母船の推進源の性質に

▲ジョージ・アダムスキー

ついて説明した。相手が言うには、船体のエネルギーはときとして短距離で空間に放射されるが、ときには数マイルも放射することもあるという。これは宇宙飛行士たちがUFOによって密接に接近されたとすれば、ホタル火現象を見ることになる理由の説明となる。UFOのエネルギー・フィールドはまたNASAの宇宙船に発生した無線の干渉やその他の電子器機の故障の理由ともなるのだ。

この第二回目の宇宙旅行でアダムスキーは、船体を推進しているのと同じエネルギーによって活性化されている宇宙塵を観察する。これらのエネルギー粒子は負電荷を帯びているらしい。そして光子を含んでいるのかもしれない。一般の宇宙塵は全面的にわずかな正電荷を持つので、負電荷のエネルギー粒子が宇宙塵に引き寄せられるのだろう。アダムスキーは宇宙塵粒子にこの負電荷が過度になるまで観察したのかもしれない。この時点でその宇宙塵粒子は、負電荷の粒子が急速に崩壊するために、爆発し消滅するらしい。このサイクルは繰り返される。これと同じような現象は科学者のヴィルヘルム・ライヒによって地球の大気中に少し観測されている。彼はその粒子をオルゴン・エネルギーと呼んだ。

## 実際に月へ行った者が実状を知っている

宇宙船が月に接近するにつれて、案内者は装置類が月の大気を記録していると説明する。また彼は大気というものは別な天体を観測するのに通常は障害にならないとも言う。この論点は本書の第七章に出ている。続いて異星人の案内者は雲の影を指摘するが、これは地球の天文家によって月の谷やクレーターで見られていたものだ。この雲はめったに濃密にならないが、暖かい地域では濃密になることもあると相手は説明する。しかも温度の上限は地球の科学者が予測するほどに高くはなく、植物、樹木、動物、人間などの存在する居住地域もあるという。

続いてアダムスキーはみずから眺め渡して、彼の月旅行が実際に発生しない限り、アメリカの宇宙開発以前にはまず知られることのないような光景について述べるのだ。彼は山々やクレーターなどに大昔の水流の跡を見るが、これは後にアポロ宇宙飛行士によって発見された。加うるに彼は地面に深いミゾがあるのを見て、過去の大きな水流によってできたものだろうと確信する。これと同じ結論はNASAが提供した証拠にもとづいて第八章で別個に掲げてある。

さらにアダムスキーは月面によってはキメのこまかい粉状に見える地帯もある一方、粗い砂や小さな砂利でできた別な地域もあると述べている。この点はニール・アームストロングによる静かの海の表面に関する説明とよく似ている。またアダムスキーはまばらに生えている植物や、毛の生えた四つ足の動物が彼の視野を横切って走るのを見ている。

一九五四年八月における月の裏側への旅でアダムスキーは巨大な宇宙船を収容するのに用いられる格納庫を見せられる。また月へ降り立つ人間は体内の減圧処置を受けるのだと聞かされる。これは月のくぼ地よりも実質的に気圧の低い高地で考えられることだ。

異星人の案内者は月の裏側の高い山々の峯に雪があることや、樹木、湖、川、多くの水のある地域などを指摘する。アダムスキーは谷や山の斜面にいろいろな大きさの集落があるのを見る。人間の住む一つの都市が目にはいるが、そこには人々や建物などがある。ここには着陸用の格納庫類があり、ここの人々は月の住人が採取する鉱物を食料品と交換するのだと案内者は説明する。NASAは月には地球にないような多くの金属類が豊富にあると結論づけている。加うるにジョージ・レナードはNASAの月面写真を分析して、月には人間が働いており、鉱物が採掘されているという証拠をあげている。どうやらジョージ・アダムスキーは地球の最も強力な望遠鏡で観察するよりも、月に関してはもっとはるかに多くの事柄を知っていたらしい。彼の著書は一九五〇年代の初めと中頃に書かれたもので、当時ソ連はまだ人工衛星を地球を回る軌道に打ち上げてもいなかった。彼が観察した事物は、彼が真実を語っていたという強力な証拠になっているのだ！

こうしたコンタクティーの観察は、宇宙開発活動によって得られた情報を分析した筆者の発見事を確証しているのである。彼らは理路整然とした矛盾のない情報を提供したのだ。彼らの発見事は、自分が実際に月を訪れない限り、推測して述べることは困難だろう。アダムスキーの書物は地球人が初めて公式に月に着陸するよりも十年以上も前に出版されているので、彼の体験記はおそらく真実を述べたものであろう。しかしUFOコンタクティーが提供した裏付けとなるような情報がなかったとしても、実際上の月の引力と大気に関する証拠は独自に存在するのである。

まだ多くの未解決の問題があるのだが、これは当然である。本書に提示されたテーマは、著者が新聞売場へ行って、そのすべてを容易に知り尽くすことができないほどに隠されてきた。

次章ではこれまでに出された情報やそれに付随する発見事などを応用して、月の歴史を述べることにしよう。この歴史は太陽系の他の多くの惑星にも関係があると思われるのである。

（以下次号）

**訳者付記**　『ムーンゲート』の第5章では驚くべき事実が暴露してある。従来、月の引力は地球の引力の六分の一というのが定説であったが、（以下5頁へ）

―超能力者が語る不思議な現象―

# 人体オーラと人間の発達度

遠藤昭則

## 他人を色で見る

各人にはさまざまな特徴があり、ある人のことを他の人に伝えようとするときには、その人の特徴、例えば目が大きいとか、穏やかであるとか、背が高いなどと話します。

私はそのような特徴を小さい頃から色で覚えていました。つまりある人はこういう色の人だとわかって、その色が頭の中にあり、他の人にその人のことを話そうとする場合には、その色を思い出しながら、「あのほら、目の大きい人だよ」と話していました。

これは人間ばかりではなくて音楽でもそうでした。

しかしそういう色については人には何も言いませんでした。だれにでもそのような色は見えているはずだから、そういうことは言わないのが日常的なことなのだろうと思って、言わないで、目が大きいとか鼻が高いとかの特徴を言っていました。

そして今から七年前に就職して教員になり、あるとき同僚に、

「ほら、こういう色の人だよ」

と言ったのです。でも相手は何のことやら解らないようで、

「えー、そんな色が見えるの?」

と驚いていました。そこで私は、はっとして、

「えっ、そういう色、見えないの? 音楽を聞いても色が見えるじゃない」と聞き返すと、

「見えないよ」

と言われました。それで、その人にだけ見えないのだろうと思って、他の人にも聞いたのですが、やはり見えないと言われました。そこで、音楽の色のことは音楽の先生なら解るかもしれないなと思って音楽の先生に聞いてみました。でもやはり、

「へえー、そういうふうに見えるの?」

と言われました。

私にはこれはかなりのショックでした。今まで他の人にも見えるものとばかり思っていたものが、自分にしか見えていなかったのですから――。それで、自分は少しおかしいんじゃないかとも思いました。でも、この頃にはもうすでにGAPに入会していて、オーラについてもいささか知っていましたので、何となくこれがオーラなのかなという考えも持ってはいました。

本誌にオーラが見える人のことが出ているのを読んだり、ヨガのチャクラの色彩についてのことが出ている本を読んだりするたびに、何かほっと安心感が湧いてきました。

それではこれから私が小さかった頃から体験してきたことについて書いてみたいと思います。しかしこれは前にも書きましたが、他の人には見えないのですから、自分の主観や好き嫌い、空想等も混ざっていると思います。それで、そこのところを考慮していただければと思います。

以前静岡支部報にオーラについての私の考えをのせて頂きました。それにはオーラのある種のものは相手のフィーリングを感受して、こちらが色としてそれをとらえるのではないかという考えを書きました。そしてその後、オーラは絶対に目で見えるものであり、フィーリングを感受して云々などというものではないと言って下さった方がありました。

## 音楽の曲のオーラを見る

私のオーラ透視で覚えている最も古いものは、小学校三年、一九六二年頃のことです。給食の時間に校内放送でクラシック音楽が流れて来るのですが、ある日ベートーベンの『エリーゼのために』という曲が流れて来ました。今でも覚えていますが、その日は曇り空でした。空想好きで、曲を聞きながらいろいろな情景が思い浮かんでくるのを楽しんでいた私は、

「この曲はなんでこう赤橙色っぽくて、かったるいんだろう」

と思いました。これはベートーベンが女性に送った曲だそうですからこう言っては失礼ですが――。そして早くグランドに出てドッジボールをしたいなあと思いながら、パンをムシャムシャと食べていました。

またそのときに、幼稚園のお昼寝の時間によく聞いたサン・サーンスの管弦楽組曲『動物の謝肉祭』の『白鳥』のメロディーを思い出しながら（もちろんこのときはこの曲の名前は知りませんでしたが）、白桃色のああいう曲ならいいのになあなどと考えました。この『白鳥』の曲は好きで、今聞いても心が和んできます。

一九七一年高校三年の頃、当時はフォークソングやロック音楽がかなり流行していた頃でした。私はあるギターを弾く人のその音が好きで、よく聞いていました。その人の音には他のギターリストの音とは違ってオレンジ色がよく見えていました。

青い色とオレンジ色はその頃好んでいた色でした。それでオレンジ色に感ずる部分のある曲はよく買っていました。

ヘルマン・ヘッセの本もよく読んでいました。それはオーラというよりもむし

ろヘッセの作品にときどき見られる陽の光のような淡いオレンジ色のフィーリングがあったからでした。でも彼の作品の色にはすごい波があるようで、つまり作品ごとに彼の精神の不安定さの色や、安心感の色が見られました。

## さまざまのオーラ

一九七六年三月四日、大学の四年生で、もう就職も決まりかけていた頃のことです（ここからはノートに書いてありましたので、図も書いておきます。この頃にはオーラについても大学で宇宙研究会というのを創って活動していたので、考えてはいました）。その日は曇っていて、私は自転車で近くにある商店街から戻ってくるところでした。そして何気なく、前から歩いて来る男の人を見ました。その日は精神と性とについての何やら難しい本を読んだあとだったので、この人の下の方のオーラはどうだろうと思って見てみると、図1のように見えました。

図1

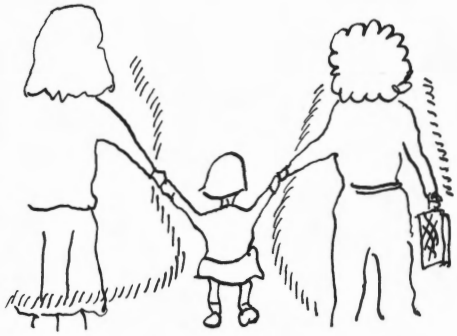


図2

次に二人の婦人と一人の子供が来たので見てみますと、図2のように見えました。

それから少したったある日、若い女の人が自転車に乗って通って行ったので、ふと見ましたら、頭部にもやもやの透明なようなものが見え、その周囲には金色っぽいものがときどき見えました。そして首の所から下へとつながっているのが見えました。図3です。

図3

さらにある年をとった方なのですが、その方が杖を持って立っていたので軽く挨拶をしました。そのときにはその方は、身体や手の周囲には素晴らしい金色が見えていましたが、肩から頭の上の部分は少し固体的で、緊張感がありました。透明さはありました。足の方はあまり見えませんでした。後で聞いた所によると、血圧が高かったそうでした。図4です。

図4

また、家の庭で桃色の久留目ツツジを見ましたところ、図5のように、花のまわりに透明な緑色が見えていました。

図5

このノートに次のようなことが書いてあります。

「これらの印象は見ようとして物体を見ても見えない。焦りが出るだけである。生命力を見るようにする。そしてそこから出ているパワーを思い浮かべる。少し待つ」

その頃、オーラを見ようとしても見えなかったときには、

「本当に見えているのだろうか。見ようとしても見えないときもあるのではないか」

そう思ったりもしました。しかしアダムスキーの『生命の科学』に、

「あらゆる細胞の中に現れている〝神〟を見るように自分の心を仕向けなさい。あらゆる生命体の生命や細胞の生命は万物を通じてさまざまの度合いに現れている神の生命であるからです」

とありますので、その頃は、始めに相手の細胞の中に金色のパワーを思い浮かべ、そして少し待つというようにして相手の印象やオーラが見えてくるのを待ちました。

オーラにはいろいろなものがあるように思います。暗い所をバックにして指の先を見ると、指先から白い霧のようなものが見えます。図6。大学の頃はラピス・ラズリという石を薄暗い所で見ながらオーラを見る練習をしました。その石の原石は所々に青いラピス・ラズリが混ざっていて、そこから白い霧のような放射状のものが出ているのですが、暗い所でその霧のようなものを見て、それが出ている所を指で押さえて明るい所に持ってくるのです。そうすると指で押さえた所がラピス・ラズリであれば正解である訳

図6

です。しかしラピス・ラズリにはこの放射状の他に、その周囲に青白い素晴らしい色があります。

## 職場での体験——病人のオーラ

一九七六年四月、教員になって初めての日。体育館で紹介があり、生徒をステージの上から見ていました。そうしましたら一人の太った男の子の周囲が秋の日射しのようで、また立ち上がる陽炎のように見えました。図7。後に聞いたところによると他の子と幾分変わった特徴を持った子だということでした。

図7

それからその集会のあとに、ある男の先生を見ましたら、図8のように、上の方に伸びているのが見えました。その先生は何事にもよく気の付く人で、私などは太刀打ち出来ないのですが、精神的な面で何かをあらわしているのかもしれません。

図8

一九七六年十月頃からある先生が入院することになりました。ときどき出て来られるときもあったのですが、その人を見ると透明な色が見えました。というよりも無いような不思議な感じでした。それでこのことを同僚に話しました。そうして翌年の一九七七年五月頃、その人が癌だということが解り、皆でお見舞に行きました。その人はかなり苦しんでいるようでした。そして身体の周囲には黒い中に緑色や薄い水色等、さまざまな色のオーラが切れ切れに飛び散って見えていました。その人はそれから少しして亡くなられました。きっと他の良き所に転生して行かれて、今頃は子供として元気に生活していることでしょう。

その人の周囲に見えるオーラが変わっていると私が言ったのを覚えていた同僚は驚いていました。それでそのことが学校の一部の先生方の間に広まり、教務の先生は、

「アメリカへ行くのだけれども、身体のまわりに見えるもの、どう見える?」

と聞いて来ました。オーラは自分で見ようと思って見えるのではなく、また見えるときもあれば見えないときもあるので困りましたが、でも見てみることにしました。そうしたらその人の肩から上の方に五十㎝位、茶色っぽい色が見えていたので、

「大丈夫、ちゃんと見えますよ」

とは言いましたが、あまり良い色とは言えませんでした。それからその先生はアメリカへ行って来ましたが、帰りにはやつれ果てて他の人に身体を支えられながら歩いて来たと、出迎えに行った人が言っていました。

よく、オーラを見てその人の死期を予測したりする話がありますが、私も一時期それで悩みました。でもアダムスキーの『テレパシー』に、

「なにか不気味なテレパシー通信しかできぬ人もあれば、もっと宇宙的発現の美しい幻影を感受する人もあります。この感受性の相違は、各人の相対的な波動が異なっているという事実によって説明することができます。(ここで相対的な波動という場合、それは個人の習慣的な想念を意味します)」

とあります。人間の寿命の長い他の惑星では転生の時には祝福されるものなのでしょう。しかしこの地球では寿命は長くても百年位であり、また色々な人がいますので、そういうことばかりを気にしていたら、暗い人間になってしまうことでしょう。ですからそういうことに関心を持っているとそのようなフィーリングばかりを受け取ろうとすることになって、あまりよくないのではないかと思いました。今から四年位前、祖母は亡くなる前まで素晴らしいパワーを持っていました。それで私も考え方を変えるようになりました。きっと祖母が教えてくれたのかもしれません。人は転生する前まで、宇宙の英知がその人を生かしてくれているということを。

そういう訳で、そのようなオーラを気にすることよりも、とにかく人に奉仕をして、私達を生かしてくれている宇宙の英知を見ていこうではないかと思うようになりました。

『生命の科学』に、

「二人の人間が親密になることによって一体化し、互いに相似てくるのと同様に、一個人はエゴのかわりに常に神(意識)というものを考えるならば、いつか神と一体化し、神に似てくることになるのです」

「人間は自分や全生物を貫いて現れている神の生命を見ることができないのですが、他の惑星の友は見ることができるのです。というわけは、進化した異星人が、たとえ人間だろうが他の生物だろうが、とにかく一つの生物を見るときは、その外形だけを見ないで、それを支えている意識を見るからです」

とあります。ですからオーラも、相手と話をするための参考位に気楽に考えることにしました。

## さまざまの状態のオーラ

さて、オーラには色で感ずるもの、それから直線的に出ているようなもの、そして霧のように見えるもの等があるようです。

一九七六年六月二十五日、家の近くのバス停の向かい側を歩いている人を見てみました。夜の七時すぎで薄暗い時でした。見ていますとその人の周囲六十㎝位の所まで赤っぽいモヤのようなものが薄く見えました。しかし、前から歩いて来る人のを見ようとして焦って見たら見えませんでした。図9。

図9

それから五年位前の静岡支部大会だったと思いますが、夜に野口さん達と歩いていましたら、野口さんの周囲に霧のようなものが見えていました。図10。そのときは野口さんの後ろから歩いていたので、隣にいた人にも言いました。

図10

一九七七年五月二十五日、曇。学校の教室で授業中、瓶に活けてある花を見ました。図11のように放射状のものと、周囲のもわっとしたのがありました。無理に見ようとしたので想像も混ざっているかもしれません。

図11

## 非行少年のオーラ

ところで人のオーラのことに戻りますが、昨年は非行問題のある暴力的な生徒を見ましたが、彼らの多くのオーラの色はくすんだ赤っぽいのや、灰色のような、そして透明な中に黒の混ざっているものでした。また彼らが先生方と怒って話をしているときにはそのオーラが波を打っているように見えて異様なものでした。私はそれを見て、そういうときには近付きたくないなと思いました。

なぜ彼らがこうなってきたのか。転生のことも考えるなら、世界各国の人種差別や戦争がなくなるまで、容易になくならないものかもしれません。つまり世界の大人達にも考え直さなければならないような所があると思います。

しかし彼らが落ち着いているときや立ち直って行くときは、だんだんと白い色等が見え始めてきます。

## 肉体の各部分のオーラ

一九八〇年六月、三年前におこなってみた新約聖書の黙示録の解読をもう一度やってみようと思いました。人間を動かしているパワーはどこにあって、それは肉体内でどのように動いているのだろうかと改めて考えてみたかったからです。

黙示録にある七つの教会は、ヒンドゥー教ではチャクラと言われているとアダムスキー氏は一九五五年五月のデトロイトの講演で言われています。そしてこの七つの箇所が人体のどこであるのかは、現在でも論争の的であるようです。それでこの七つの位置ももう一度解読し直すことによって解るのではないかと思いました。

しかし少し解読し直してはみたものの重要なのはアダムスキー哲学であるからと、その後の解読はしてみませんでした。そこで少し考えたことは、チャクラと人間の想念との関係でした。

さて、どのようなチャクラについての本を見ても、生殖器の近くにあるチャクラについてはよく書かれていませんでした。その部位は生命にとって重要な所であるとは書いてあるのですが、次元が低いように書いてあるのです。

しかし目を閉じて身体の中を見てみると、その位置は金色に見えていました。それからヘソの下の所はオレンジ色と青色、背中の腰のあたりは金色と暖かい色、心臓、胸のあたりは乳白色、喉の所は青色(?)、後頭部のくぼんでいる目にあたる所は紫色、額は白っぽい色、というようにその頃は見えました。

それでチャクラの本などよりも、自分の内部からの印象を信ぜよという言葉を思い出して考えてみました。

身体の中を見ることは、それまでにもありました。色ではありませんが――。七二年か七三年の頃のある日、自分の部屋で寝ころびながら外に見える空をぼんやりと見ていました。それから目を閉じると何か見えてきました。少し待っていると丸いものであることが解りました。それで、はてなと思ってさらに見ていると、それに細い管のようなものがついていて、そうしてだんだんと映像がはっきりしてきました。色はついていないで、灰色のような、トーンのない映像でした。それは膀胱とその周囲の様子であり、そして背骨もうっすらと見えていました。

なるほど『生命の科学』の第十課に両手を見つめる練習があるけれども、その応用でできたのかなと思いました。十課のそこには、

「更にレントゲンで透視する以上に、手の構造や、いかなる機械装置でも示し得ないほどのエネルギーの運動などを見ることができます。これは手ばかりでなく、知りたければ人体のいかなる部分にも応用できるのです」

とあります。ですからこの応用で、肉体のある部位から発せられているパワーも見ることができると思います。そして見るときには、

「見える、見える、自分には見えるんだ」

と思うことが大切です。それに、本当はだれにも見えているのに、一般の人はそれを素通りさせているだけなのですから――。

六年位前、ある方とお話をしていてオーラの話になりました。それで、

「大抵の人は人間の身体の周囲にあるものを見ようとしないからじゃないかなあ」

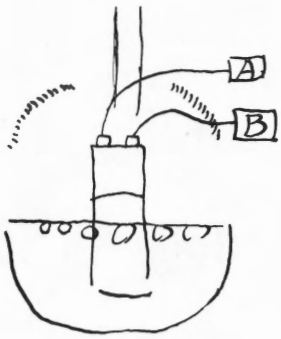
とか何とか言っていましたら、

「なんか僕にも見えてきたみたいですよ。今、こんな色ですか?」

と言われました。それは私が見ていた色と同じ色だったので、

「そうですよ」と言いました。ですから、見えるものなのだと思っているとだんだんと見えてくるようになるのではないかと思います。初めは想像かもしれませんが、確かめていくうちにそれが正しいものとなっていくと思います。

それで一つおもしろいことを覚えています。この方がある日友人と私の家にやって来ました。そして病気を治すという実験装置を持っていました。そこからは図のようなオーラが出ていました。そして装置から出ている線の先にある金属板を彼の友人につけました。




その人は幾分風邪気味でした。するとしばらくしてその人からAの金属板、線へと風邪のフィーリングのオーラが見えました。私はその線の近くにいましたので、これはたまらん、と反対側に移動しました。その装置からはもう一方の線を通ってその先にあるBの金属板、そしてその人の身体へと良いフィーリングのオーラが見えました。あとで聞いてみますと、私が動いたとき、その人は風邪がすっきりと治ったような感じを受けたそうです。つまり私の見たものがあっていた訳です。

## エネルギーの通り道を透視

とにかくそういう訳で、チャクラについて考えていた頃も、肉体の各部を見てそこから出ているパワーの色を見ようとしていました。そして次のようなことが見えてきました。

下位にあるパワーとヘソのすぐ下の部位と関係があるのと、それから足の方へパワーが金色の細い道（複数）を通って配分される様子です。その道は経絡（けいらく）（注＝東洋医学でツボとツボを結ぶ道）の位置のようでもありますが、それは体内に見えましたので、体内にも経絡のようなものがあり、そこをエネルギーが通っているのかもしれません。

金色の通り道は他の時にも見たことがあります。透視能力者の亀田一弘先生を訪ねて色々とお話をうかがっていたとき――そのときは身体のパワーについてのお話だったのですが、いつものように先生の額の近くには白いオーラが濃く見えていました――私の身体の後ろの腎臓のあたりが暖かくなり、それから背中を通って脳へと金色の光が通るのが見えました。そうしましたら身体に充実感が湧き起こってきました。図12。

図12

また今年、新幹線に乗っていて、暇だったので身体の経絡を透視して絵にしてみようと目を閉じて見ていました。そうしましたら、図13のように目からパワーが送られている光景が見えてきました。

図13

これはなぜだかわかりませんが、目にも肉体内で経絡がつながっているのかも知れません。経絡は現在でもまだ解明されてはいないようですが、いずれそのうちに解明されるものと思います。そのときに、それが正しいか誤っているかがわかると思います。しかし経絡は決して神秘的なものではなくて、そこがエネルギーの通り道であるならば、そこにはエネルギーが通れる何かの組織が実在していなければならないのではないかと思います。『生命の科学』には雷について次のように出ています。

「雷の放電に先立って、雲と雲とのあいだには明らかにただの空間しかなかったのですが、交点には雷光を生じさせる何かがあったにちがいありません。つまり必要な要素がそこにあったのであって、それを雷光のかたちにするのに適当な条件を必要としたにすぎません」

## 生徒の指を治す

私は肉体内をただ見ているだけでは人への奉仕にはならないのではないかと思いました。そこで何かそのような奉仕はできないかと考えていました。そうして中学校でギター部を創って活動をしていたある日一人の生徒が指が痛いと言い出しました。腱鞘炎になって指が動かなくなっては大変と思い、どれどれと見てみることにしました。それはエネルギーの浪費や不自然な流れによって起こるもののようですので、そのエネルギーがうまく流れるようにしてあげればよいのだなと思って見てみました。そして治すのは私ではなくて、相手に宿る宇宙の意識であり、私はそのエネルギーの誘い水のようなものであると思いながら、まず痛い指の上に私の指をのせてみました。すると図14のように金色の線が見えてきましたので、指だけではなくて、その線が見えている腕の方まで私の指を動かしていって、青いラピス・ラズリの霧のようなパワーでそこが壮快になるイメージを思い描きました。私の指からは青い色が出ていました。そうしてその子に今の様子を尋ねながら行いました。

図14

四分位行っているうちに指を動かしても痛くないようになりました。でも大事をとってしばらくギターを弾かないように言いましたが、二日後ぐらいにはもう弾いていました。今でもギターを弾いていますが、異常は全くないようです。

本誌でアリス・ウェルズ夫人がオーラのことで、

「紫色はすぐれた色です。多くの人は紫色は精神的な色だと考えていますが、私

は〝精神的〟とか〝肉体的〟というような区別はないと思います。みんな一つなんです。みんな創造主の表現ですよ。あらゆる物を同じ明るさで見るようになると、精神的と肉体的とかいう区別もなくなります。それが生きた常識です。私たちはこの地上に生きているのですから、みんな生きて自分のレッスンを学ばねばならないのです」

と述べています。この地球上にはさまざまな人が暮らしています。ですから、各人によって好みの服の色が違うように、好みの曲も違うと思います。

## GAP会員のオーラの色

次にGAPでお会いしてきた方々についてですが、まずAさんです。私が初めてAさんにお会いしたのは今から9年位前の月例会の時だったと思います。東京文化会館の入口の所に立っておられましたが、そのときは金色と赤のフィーリングを感じました。しかしだんだんと年を経るごとに灰色や黒が混ざってきました。そしてある月例会のときは濃い白っぽい色、その次の月例会のときは薄い白に赤や黒の入ったような色などと、月例会ごとに色が極端に悪く変わって見えました。それで、この方は一体どんな生活をしているのだろうと思ったことがありました。その後GAPを去って行かれたので今はわかりません。

それからBさんは、濃くて白い色が見えます。私が入会したときからよく知っていましたが、Bさんには前から白い色が見えています。

Cさんには金色のオーラが見えます。常に自分から良き想念を放っていこうとされている方だと思います。

Dさんは霧のように青い色を感じます。頼り甲斐のある、包容力のある方だと思います。

Eさんには昨年は濃い白っぽい色を感じていましたが、最近は青などの色も感じます。

それから以前おられたFさんは、薄い青にオレンジ色を感じていましたが、目が異様にくぼんでいて、また、それらの色やその方から受けるフィーリングから考えると、肝臓か生殖器の何かの力がうまく使われていないようでした。

でも、勘違いなさらないで下さい。私はどんな人でも同じ地球人であり、そのような色にばかりこだわっていてはいけないと思っています。どのような人でも創造主に祝福されて生まれてきたものと思います。ですから私は相手を批判したり、崇めたりするためにオーラの色を感じようとしているのではありません。ただ小さい頃からそのように感じて、それで見ているだけのことで、この人がこの色に見えるからすごいとか、この人はこういう色だからよくないとはそれほど考えてはいません。私は、一個人の良い、良くない（と言ってはいけませんが）ということは、その人と話をしたりすることによって解るものだと思っています。でももちろん、イヤだなあと思うオーラの色の人にはそれ程近づきたくはありませんが――。

ついでながら物体としては、バシル・バンデンバーグが開発した円盤の推進装置の写真から見えるのと同じ程に良いオーラを放つ装置は見たことがありません。（注＝この写真はアダムスキー全集第三巻『UFO問題の真相』に掲載されている）。

久保田先生には濃い紫色が見えます。そしてときどき良い意味での力強さをあらわすと思われる赤も少し感じるときもあります。

六月の月例会で先生のお体を見ると、図15の矢印のあたりに薄灰色っぽい色が見えましたので、松村さんと先生のご健康の様子を話していました。でも月例会が終了してお話をして下さったときに、金色のフィーリングで濃い白い色がお顔の周囲に見えましたので安心しました。（注＝この日編者〈久保田〉は体の調子が悪く、よくセキが出た）

図16　図15

今年の七月に、「私のオーラは？」と先生が言われたときに見えていたのは、図16のような形でした。

## オーラは本来だれにも見えるもの

アダムスキー氏の写真のオーラの色がまぶしすぎると以前言われた方がありましたが、私には、六五年四月のシドニーでのアダムスキー氏の写真は周囲が金色に見えます。

七、八年前に、自分より次元の高い人のオーラなどは見えないのだと言っていた人がありますが、私はそうではないと思います。次元の高いアダムスキー氏のお顔は写真で見ることができます。オーラも同じことであって、それは神秘的なことではなく、人間の一部でありますから、そんなに気にせずに、こだわらずに、ただその方のお顔などを見せて頂くのと同じように見ればよいと思うのですが――。

オーラを宗教のように神聖視するのではなくて、どのような人にもそれは見えているのではないかと思います。ただ、それに気付く方法を教えられていないので、それを素通りさせているだけではないかと思います。理論付けて難しく考えることはできます。しかし、ただ感じればよいものを、そのような理論で埋めつくしてしまってはならないと思います。

記事中のイラストは筆者画

■宇宙哲学解説講座■(2)

奇跡的に良き運命を持つ方法を詳述

# 転生とカルマ(2)

〈日本GAP会長〉久保田八郎

前回掲載の第一回目の記事はかなりの反響があり、好評を博したけれども、少数の方から疑問を寄せられたので検討した結果、いささか説明不足のために誤解を生じた部分があると思われるため、本号ではまず補足の意味で解説してゆくことにしよう。

## カルマを変えることはできる

前回の記事で、人間の転生はすべてカルマの法則に従って来世が決定する意味のことを述べたところ、ある会員の方から電話があって、人間の環境や運命がすべてカルマで決まるものならば、この世界に住むあらゆる人間はすべてカルマのためにがんじがらめに縛られており、どうしようもないのではないか。殺人事件で殺される人、災害や事故などで死ぬ人などはカルマにより、まるで死ぬために存在しているようなものではないか、という質問があった。

これについては前回の記事で説明の余裕がなかったために今回書く予定であった。

結論から言って、カルマ(因果の法則)は絶対的なものではなく、悪しきカルマをのがれる方法はあるのである。たとえばAという人が未来のある日、交通事故で他界するように運命づけられていたとする。運命づけられていたということは大体に事後に判明するのだが(つまり大量死という現象が発生してから、あのAという人はこの事故で死ぬように運命づけられていたのだと第三者が言う場合、Aはそのような運命にあったのだと人々から判断されるという意味)、それを事前にのがれることはできるのである。つまり脱線転覆して多数の死者を出した列車があるとすると、本来ならばBもそれに乗る予定であったものを、直前になって何らかの理由で急拠予定を変更せざるを得なくなり、事件後になって「ああ、乗らないでよかった」と胸をなでおろす場合、これは偶然ではなくて、何かの理由によるカルマの修正が行われた、と言えるのである。このような実例を挙げると枚挙にいとまがない。およそ世の中に、〝偶然の結果〟というものはあり得ず、いかなる些細な事でもすべて〝何らかの原因による結果〟とみるべきで、人間の運命や宿命というものは、過去に本人が作った原因によって形成されるのであるから(遠因としては過去世で作った原因もある)、したがって、ある結果が出るように運命の青写真を四次元世界に描いていたとしても、途中から全く別個な原因を作れば、青写真は描き直されることになる。これがカルマの修正である。

## カルマを変えるには

どうすればよいか。ここでアダムスキーの宇宙的な哲学が応用されることになる。アダムスキーによれば、人間の本質は活動する想念であるという。つまり私たちは四六時中常に想念放射線を放射しながら生きている。その想念波動が本人の運命を形成するようにある一定の原型(パターン)を不可視の世界で記録する。これをアカシック・レコードといい、特殊な能力を持つ人はこのレコードが読めるため、その人の未来の運命が予知できるのである。ただしそのような超能力者はごくまれにしか存在しない。

運命や環境を変えるものは人間の意志の力であり、行動力なのだと言う人があるかもしれない。たしかにそのとおりだが、意志とは想念にほかならない。強力な想念が強い意志や信念となる。したがって行動の源泉は想念である。この想念は出しっぱなしで次々と消滅するのではなく、空間のどこかに記録されるということは前述のとおりで、古代インドの偉大な哲人たちはこのことに気づいていた。

とにかく自己の想念の集積したものが運命の青写真を描き、アカシック・レコードとなるので、想念内容には充分に注意する必要がある。だから日本GAPでは想念観察を奨励しているのである。

大事故に遭遇するような、または何をやってもうまくゆかないようなカルマを根本的に変えて、明るい建設的な素晴らしい運命を展開させるにはどうすればよいか。それはすなわち「明るい建設的な素晴らしい想念」を常に起こすようにすればよい。それだけのことだ。人間は自分で考えるとおりのものになるので、明るい宇宙的な非利己的な楽しい想念を起こすようにすれば、それなりの素晴らしい環境と運命が展開するのである。この因果関係は科学的には解明できないが、単なる抽象的な観念論でもない。多くの実例からして帰納的にそう言えるのである。

だから人間はカルマによってがんじがらめに縛られている存在ではない。悪しきカルマからの解脱の自由が与えられているのであって、ここに人間の素晴らしさがあるのだが、一般人はこの法則に気づいていない。自分などは生涯どんなにもがいても、うだつのあがらぬ劣等な人間だ、なるようにしかならないのだ、と思い込んでいる人が多い。そのように思い込んでいる限りにおいて、その人は劣敗の人生から脱け出せない。そして悪しき想念によって、ますます悪しきカルマを作り出すのである。

再度言うと、人間の運命は絶対的なものではない。どのようにも変えることが

できるのである。変えようと思えばまず希望を持ち、それにしたがった強烈な想念を起こすことが必要である。

## 具体的な実践法

この講座が抽象的な観念論でないことを証するために、具体的な方法を述べることにしよう。

まず大災害などに遭遇しないようにするためには、基本的に言って前記のとおり宇宙的建設的な明るい想念を常に起こすようにする。これを明るい想念（ブライト）といい、この逆は暗い想念（ダーク）という。想念を起こすといっても、慣れない人は急速には実行できないだろうから、アダムスキーの哲学関係の書物である『宇宙哲学』『生命の科学』『テレパシー開発法』などをじっくりと読んでゆく。これらは改訂決定版が文久書林のアダムスキー全集の中に加えられて、今秋発刊の予定であるから、旧版はやめて、この改訂決定版を読むほうがよい。もちろんアダムスキーのUFO関係の各著書の中にも宇宙的な素晴らしい思想が述べてあるから、それも読むとよい。そうすれば次第に宇宙的なブライト想念がわき起こってきて、それが習慣化する。そうなってから、次に自分の望ましい物事を実現させるために反覆思念をする。

たとえば何かの病気で医師の治療を受けても容易に治らないで苦しんでいる人は、まず宇宙的なブライト想念を起こし、それを土台にして、「自分は大宇宙の力（コスミック・パワー）によって創造され生かされている者であるから、本来完全な人間である。病のごとき故障や不完全な箇所は存在し得ないのである。いかなる病気といえども、必ず治るのである。治る、治る、治る…」と強烈な思念を反覆する。そうすると肉体が自然にそのように変化して病気は治るのである。この反覆思念は一種の奇跡を生じさせるので、これをミラクル・ワード（奇跡を起こす言葉）と称して筆者自身も実践しているが、いままでに驚くべき効果をあげたことが沢山あるし、GAP会員中にもこれを実践して奇跡を起こした人が少なからずいる。

このミラクル・ワードをとなえるときに、ついでに、すでに実現してしまったイメージを描くと効果は倍増する。病気の場合は、自分がすでに完全に治癒して素晴らしい健康体になり、喜び勇んで仕事に励んでいるか、軽（かろ）やかに散歩でもしている光景を心の中に鮮明に描き続けるのである。これをイメージ法と名付けてミラクル・ワードと共に会員にすすめているが、これまた素晴らしい成果をあげている。心臓病が治った婦人とか、ひどい高血圧が正常になった男性だの、いろいろ実例がある。これは明らかに精神身体医学の応用であって、無知蒙昧（もうまい）な迷信ではない。

こうした病気の奇跡的な治癒などは、人間が宇宙的な想念を起こすことによって肉体が宇宙的に変化してくるのだとも言えるだろう。生老病死のうち、老だの病だのは地球人だけが持つ体験だと『宇宙からの訪問者』で異星人のマスターが語っている。そうだろう。大半の一般人は、何かの病気にかかった場合、必ず病院へ行って医師の治療を受けなければならないものだと思い込んでいて、想念の力によって治るとか治すとかは夢想だにしないのだ。これが誤っていることは実は優秀な医師がよく心得ているのである。もちろん骨折などの場合、思念だけで元通りにはならないので、そのときは医師の手になる科学的な治療を受ける必要がある。その他、医学によって全治する病気なら科学の恩恵をこうむるのがよい。しかし平素から宇宙的なブライト想念を起こすようにしていれば、だいいち骨折という災厄に見舞われることはない。そのような危険をのがれるカルマを自分で気づかずに作っているのだ。

## 危険をのがれるカルマ

病気の治癒ばかりではない。人生の望ましい物事は何でも自分の想念どおりになる。たとえば日本GAPは国際的な教育活動の一端として、毎年夏に海外研修旅行を実施して、かなりの成果をあげている。ところが会員のなかには、なんとかして参加したいと思いながらも費用または職場の休暇取りのいずれかで不都合が生じて、普通ならば逆立ちしても参加できない状態にありながら、絶対にあきらめないで、強烈にミラクルワードをとなえ、すでに喜び勇んで旅行に出かけている光景をイメージとして描いているうちに、奇跡的に参加できるようになって驚喜したという人が何人かいた。私が聞いただけでも二人や三人ではなかった。これなども早く言えば自己の想念によるカルマの修正である。

旅行といえば私は過去に海外団体旅行を通算七回企画し実施しているが、いずれの場合も全く事故のない完ぺきな旅を終えるので、提携旅行会社の田中氏も首をひねって不思議がっておられるのである。これは私自身が危険をのがれる特殊なカルマの持主であることにもよるが、それに加えて参加者であるGAP会員の方々の宇宙的な信念の力と高度な協調性が原因をなしていると思われる。私は出発時にいつも次のように訓示することにしている。「各自がすでに楽しい旅を終えて無事に帰宅し、家族と喜びの再会をしているイメージを描きながら旅を続けて下さい。そうすれば全員無事に帰ります」集団による信念とイメージの集積は個人のそれよりも強力になるから、これなら事故など起こりようはない。

その他、望ましい物品の入手、就職、結婚相手とのめぐり合い等、かなりの実例があるけれども、紙面の都合により省略しよう。

ただし望ましい物事を実現させるのに反覆思念とイメージを描くだけで、あとは手をこまぬいて何もする必要はないかというと、そういうわけではない。場合によっては実現の方向にむかって実際的な活動（アクション）を起こすことも必要である。たとえば、ある一流大学に入学しようと思う場合、すでに合格して喜び勇んで通学しているイメージを描き、「合格した、合格した」ととなえていさえすればよいかというと、これでは不充分で、入試のた

めの勉強をやらねばいけない。しかしその場合、同じ勉強をしても自分が内部の宇宙の意識の手に導かれて、合格するような線に沿った学習法を知らず知らずのうちに応用しているようになるのである。したがって、効果のないがむしゃらな猛勉強をする必要はなくなるだろう。

ミラクルワードをとなえたりイメージを描き続けて希望を実現させる方法を、かりに〝奇跡実現法〟と名付けることにすると、この実現法によってもなおかつ希望する大学に入学できない場合は、「この大学には入学しないほうがよい」と内奥の宇宙の意識から指令が来るのであろうから、その場合は計画を変更して他の学校を志望するのがよい。それによって新たに良き運命が開けるはずである。

## 宇宙の意識が修正する

ここで人間は「何が幸いになるかわからない」という法則に目を向けることが大切である。知能の程度からいって一流大学に入れる力のない人が奇跡的に入学できたとしても、入ってから他の学生についてゆくのが大変であろうし、落ちこぼれとして中退すれば生涯コンプレックスからぬけ切れないだろう。運よく卒業できて社会に出ても、ヘマばかりやれば、「それでも一流大学出か」と人々の嘲笑と軽侮の的になる。これは本人にとって地獄の苦しみだろう。したがって宇宙的信念を保持しても分不相応な高望みをした場合は、内部の宇宙の意識の手によって修正されるのである。それは本人を良き方向にむかわせるための修正であって、一種の恩寵（ちょう）の法則なのだが、一般人はこれに気づかないで、身の不遇を歎いたりする。

一流大学に入学できなくても、自分の能力にふさわしい学校に入って学習し、卒業後は分相応な職業についても社会に貢献することは充分に可能である。場合によっては学校を出なくてもよい。それでも奉仕的な活動は大いにやれる。

私自身の不可思議な運命について詳述する余裕はないが、不可視な〝何者か〟が常に私を宇宙的な方向へむかわせようとして、軌道からはずれそうになると、修正して正道にもどそうとしているかのように思われた実例がいろいろある。

そこでミラクルワードの反覆やイメージ法による実践に際しては、心（マインド）と、万物を生かす宇宙の意識（コズミック・コンシャスネス）（または大宇宙力（コズミック・パワー））との一体化をはかりながら、これを土台とした上で実践しなければ、真の宇宙的な強力な信念がわき起こらないし、希望事が必ずしも実現するとは限らないということに注意すべきである。再度言うと、宇宙的信念を土台とせずに高望みしても必ずしも実現するとは限らないのだ。逆に、宇宙的信念を土台とすれば、実現するものとしないものとをあらかじめ直感的に見分けることができるようになるのである。

以上で人間のカルマは絶対的なものではないこと、宿命論で縛られる必要もないことがおわかり頂けたと思う。人間の運命はすべて本人の想念内容で決まるのであって、根本的には外部からの干渉によるものではない。高級霊や守護霊などが人間の運命やカルマを修正することは絶対にあり得ない。なぜならそんなものは存在しないからだ。これを存在すると思い込んで、自分が守護霊に援護されているという想念を持ち続ければ、その想念に応じて運命が展開する。そのためにいかにも守護霊が存在するように思えるのである。また人間にとりついて苦しめたり病気にならせたりする憑依（ひょうい）霊や浮遊霊なるものも一切存在しない。結核は結核菌という実体によって発生するのであって、悪霊の仕業ではない。

## 男女両性を交互に繰り返す

さて、いわゆる霊界なるものは存在せず、人間は死後数秒間でその実体が別な肉体（新生児）に移行して瞬間的に転生すると前回の記事で述べたところ、『カルマの清算(1)』（本誌82号22頁）の例を見ると、アリゾナ州のテンプルに住むあるカプルは四世紀から現代まで四回しか結婚しておらず、その間隔が長すぎるので、人間が瞬間的に転生するというのは矛盾するのではないかという質問をよこされた方がいた。

これは22頁最下段二行目を注意されるとよい。「以後二人は何度も転生をくり返したが、二度目に出会ったのはメキシコのトルテカ族の男女としてである」と書いてある。つまり二人が四世紀に世を去ってからトルテカ族の男女として転生するまでのあいだに数百年の空白があったのではなく、その間、二人とも連続して転生を繰り返し、たぶんある生涯は独身ですごしたり、ある生涯では別な異性と結婚したりしていたのであって、最初の相手と二度目にめぐり合ったのがメキシコであったという意味である。ナワ系の種族であるトルテカがメキシコの歴史に姿を現すのは十世紀であるから、約六百年の差があるけれども、その間、二人が霊界に住んでいたというわけではない。

また、転生を繰り返すにしたがって男女の性が逆転するとは支離滅裂だという声もあったが、これについては前回で説明をしなかったために誤解が生じたと思う。人間は転生するたびごとに基本的には男女の性が逆になるのである。しかし、ときには例外として同じ性を続けることがある。たとえばアダムスキーの夫人であったメリーは金星に転生してもやはり女性としてアダムスキーと会見している。ただしイエスは地球で他界してから火星で女性として転生し、そこで精神的な指導者として一生涯を終えてから、次に金星に男として転生したという。これは基本的な法則どおりに転生している。

人間はなぜ男女の性を交互に繰り返しながら転生するのか。おわかりのように、同じ人間でも男と女は肉体の構造や立場などが異なるために、この両方を体験しないことには人間というものが理解できないからである。そしてさまざまの人種や環境や職業などを体験してこそ、自己の精神的向上が行われるのであって、一定の性、一定の人種や環境にとどまりながら転生を繰り返したのでは進歩しない。そして、宇宙の法則に目覚めてそれに沿

った生き方をすれば、地球上だけでなく、地球からさらに高次な惑星へ転生する。こうして人間は転生の旅を続けながら、限りなく宇宙的に進化してゆくのである。

以上の件、特にメリー夫人の転生した姿、すなわち金星人の少女として生まれかわった人とアダムスキーとの劇的な会見の詳細についてはアダムスキー全集第三巻『UFOとアダムスキー』の冒頭に掲げてある『金星旅行記』を読まれたい。大母船内での感動的な場面、少女の口から出る深遠な転生の法則、金星の驚異的な光景などを知って読者は深い感銘を受けられるだろう。

## イエスの姿を透視して描いたアダムスキー

しかし転生とか過去世の記憶の呼び覚ましという命題は非常に複雑で難解な問題を含んでいる。転生を証明する科学的な計測装置もないし、過去世を映し出す機械があるわけでもない。肉眼で確かめなければ信じられないという現代人は、こうして不可視なものにたいする感知力を失ってゆくように思われる。

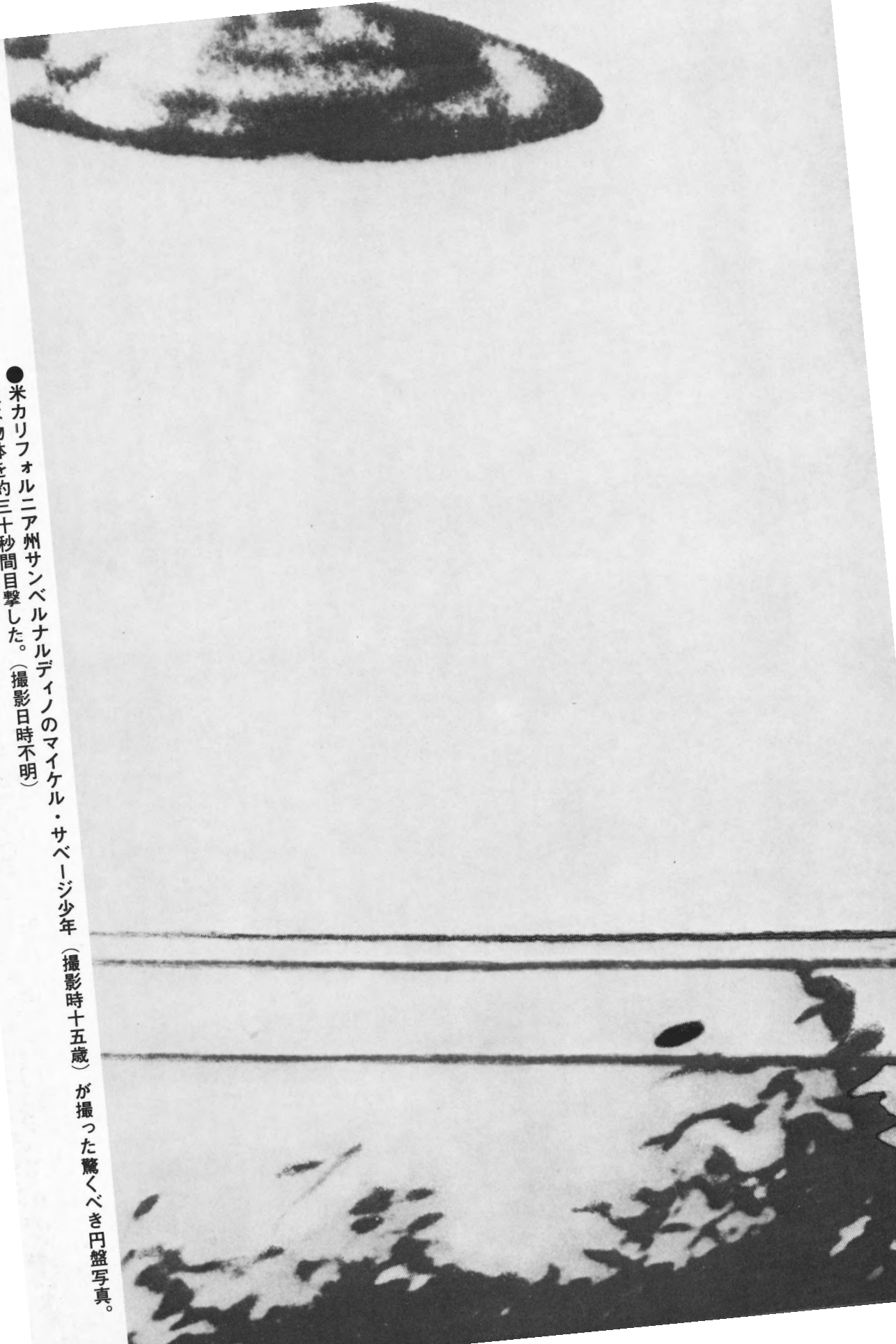
だが精妙きわまりない人体には機械力をはるかに超える感性が存在し、未来を予見したり、いわゆる超能力を発揮して信じられないような離れ業を演じたりする人もある。

アダムスキーもその一人であった。彼はテレパシー、オーラ透視、過去世透視、遠隔透視などが可能で、自宅で日曜日に開催する研究会などでは、オーラによって参会者の人柄を判断していたと、高弟の一人、故アリス・ウェルズ夫人が私に直接話してくれたことがある。また同夫人も過去世で自分が仏像の彫刻師であったことがあり、その頃に作った仏像をメキシコで発見して買って帰ったと言って、その作品を見せてくれたが、相当な出来栄えであった。とても素人の作品ではない。これは昭和五十年十一月に初めて彼女とカリフォルニア州ビスタで会見したときのことである。

五十二年八月にはメキシコ市で素晴らしい物を見た。同市に住むアダムスキーの高弟の一人であった故マリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人の城のような豪邸に保存してあるイエスの肖像画である。これこそかつてアダムスキーが二千年前のイエスを透視して描いたという油絵の等身大の絵画で、二階の特別室に飾ってあった。空間の四角な窓の中にイエスの姿が現れたので、見えたとおりに描いたのだと夫人が語っていた＝**写真**。ふだんは人に見せないことにしているということだったので、日本人でこれを見たのは私だけかもしれない。ある理由によりこの作品を夫人から譲り受ける可能性もあったのだが、惜しくも三年後に他界されて、そのとき遺言により絵は丸めて棺の中に入れられ、遺体と共に焼かれたという。そのほうがよかったかもしれない。

▲アダムスキーが透視して描いたイエスの肖像。メキシコ市のマリア・クリスティーナ・デ・ルェダ夫人の邸宅で筆者撮影（カラー）。

（以下次号）



●米カリフォルニア州サンベルナルディノのマイケル・サベージ少年（撮影時十五歳）が撮った驚くべき円盤写真。彼は物体を約三十秒間目撃した。（撮影日時不明）

# ●UFO目撃報告 UFO CONTACT

## 十字を描くUFO

〈静岡支部〉 筒井 徹

私が参加しようと期待に胸をふくらませ続けた日本GAPの「エルサレム宇宙考古学の旅」が八月十二日より始まりました。しかし私は日本の我家に居りました。この日が自分の誕生日でもあり、これを機会に、より宇宙的な人間として徹底的に生まれ変わろうと決心していたので、旅行に参加できなかったのはとても残念でしたが、内部はなぜか悠然としています。

そこでこの日を期して久保田先生のようにUFO観測を始めようと強く感じ、夜中の一時頃から富士市の自宅の屋上にあがり、スペース・ブラザーズの方々に送念を始めました。星が沢山浮かび、流星のようなものをいくつか見ました。

十分位して西の上空に視線を向けた瞬間、上の方から下に向かって、かすかな白い物がスーッとやや不規則に流れてきて、最後にピカピカと鮮やかに、しかも強烈にオレンジ色に輝き、消えてしまいました。「ばかに長く大きな流星だな」と最初は思いましたが、だんだんとスペース・シップではなかったかと感じてきました。一時間位して疲れてきたので終わりにしました。

翌十三日の夜、昨夜の光体がスペース・ブラザーズの方々だったのかと質問をしようと、十二時すぎにまた同じ場所に立ちました。やはり星が沢山見えます。さっそく質問内容を天空に響き渡るように送念し、イメージを描きました。

すると十分位して西の上空に視線を向けた瞬間、昨夜の白い軌跡の上の方の部分と交差するように、水平に同じ光体が現れて消えました。昨夜との違いは、白い軌跡が非常に短かっただけです。これが答のようでした。ちょうどイスラエルの方向です。「これは十字架を意味するのか？」と思いました。

昨夜の送念の内容はスペース・ブラザーズの方々に対する大感謝と、日本GAP会員への強力な援助、エルサレム研修団の大成功等のお願いなどです（これは久保田先生に教えていただいた方法を応用しました）。このことからして今夜の光体の出現は、エルサレム研修団に対する祝福と励ましであったのだと感じました。そしてこの場所でこういうことが発生したのだから、さぞかしイスラエルではもっと素晴らしいことが発生するんだろうと感じました。

スペース・ブラザーズの方々は非個人的に真剣に呼びかけをすると確実に答えて下さることを確信しました。何か、より強い親密感も湧いてきました。「スペース・ブラザーズと私は一体である！」と堂々とミラクルワードを叫べるようになりたいと思います。その時には、もしかしたら上空から堂々と降りてきて、我々地球人を指導して下さり、この世界が太陽系の一員として美しく豊かになっているかもしれません。それを常にイメージしながら弱小な自分自身を奮い起たせ、無限に強大な宇宙力を少しずつ認識してゆきたいと思います。信念と謙虚さの重要性を強く感じた夏の二晩でした。

## 夜空に巨大な母船？

〈大阪支部〉 南野孝夫

今年八月十五日早朝、私は奇妙な物体を目撃しました。ペルセウス座の流星群を見ようと思い、双眼鏡（ニコン7×50）を三脚に固定して観察していました。流星を三個ほど見て双眼鏡を北天の天の川に向けました。実視界七・三度の視野で輝く天の川は星の数限りなく、その日は六等星が楽に見えるほど空が澄んでいて、しばらくその美しさにみとれていました。

午前四時二十五分頃、突然視野の星々が下から消えてゆくのがわかりませした。私は鳥か飛行機の胴体が横切ってゆくので、そのように見えるのだと思い、気にとめませんでした。ところが物体が移動して視野からはずれかけたとき、思わずその物体を追跡していました。よく見るとその物体は翼がなく、葉巻型で、標識灯がなく、無音で、胴体は真っ黒でした。物体の両側のかすかな明るさで、かろうじてその形を認めることができました。

圧倒的な重量感で一直線にゆっくりと銀河を横切って行った物体は母船としか言いようがありません。これを機会にGAP活動をますます積極的に推進してゆこうと思います。

〈付記〉物体の大きさについて。双眼鏡で見たところでは視野の四分の一位の大きさでした。それで私なりに素人計算をしますと、実視界七・三度を四で割れば約一・八度。倍率が七倍なので一・八度を七で割れば約〇・二六度。したがって物体を肉眼で見たとすれば約〇・二六度の大きさ。月は見かけ上の大きさが〇・五度ですから、大体に月の半分の大きさになります。

当日私は北天の星座であるカシオペアとペルセウスの中間に位置する二重星団を見ていましたので、物体はほぼ天の子午線上を北から南へ飛行したものと思われます。仰角は約六十度。方位は北から東へ約五度。目撃時間は約十秒。目撃場所は大阪府堺市東三国丘町です。

**双眼鏡の視野**

① 黒い陰が下から出てきた。

② この時点ではまだピンとこなかった。

③ このとき物体に翼がないのに気づく。

④ 急いで双眼鏡で追跡する。

**物体の拡大図**

両側が少し明るい。全体がぼやけているようで、はっきりした形はわからなかった。

# 私のUFO目撃と予知体験

〈横浜〉 浜田靖子

私のUFO目撃体験を書かせていただきます。まず初めに、少し不思議な記憶についてです。これは十二年程前に友人から「UFOを見たことがある?」と質問された時に思い出したもので、それ迄は全く忘れていたことです。今から十五～六年前の、とても良く晴れた日に自分の家（当時は社宅に住んでいて、小さな庭がありました）の庭から真青な空を見上げていたときです。雲一つ無い澄みきった空に、銀色に光る葉巻型のものが音も無く浮いているのを見ました。しかしそんな物を見てだれかに話したとか質問をしたということが全くなかったようですし、その前後に何をしていたのかも全く覚えていないのです。この記憶のおかげで私はUFOのことを簡単に信じることのできる人間になったような気がします。絵の様に美しい空を、家を左にして見ていたということだけは、はっきりしています。ただ、その事が重要な事だとはアダムスキーの『宇宙からの訪問者』を読む迄は全くわかっていませんでしたし、この本の頭の部分に全く同じ母船のことが書かれているのを読んだときはものすごく驚きました。それ迄は、UFOが飛んでいるからといってそんなに騒ぐことはないのにと思って、本も特に読みませんでした。

GAPに入会してから、初めてその話を母にしたところ、やはりその頃、庭でラジオ体操をしている時に金色の丸い光体が空を飛ぶのを見たそうです。そして隣のおばさんも同じ物を見たそうで、二人で「不思議な物が飛んでいた」と話しあったそうです。

会報やアダムスキーの著書を読んで感動してからは、できれば生存中にもう一度UFOが見たいと思うようになり、よく空を見上げるようになりました。それから八二年度の総会へ出席後、UFOをひんぱんに見るようになりました。

一九八二年十月二十二日（金）午後七時五十五分、仕事の帰りにとても疲れていた私は、バスから降りてフラフラと歩いていて一番遅れてしまいました。いつものように上空を見回していると西側の富士山の左手上空に赤い星のような光体を発見。「ああ、また飛行機か」と思いつつも見ていると全く動きません。あれ?まさか?と見ているとしだいに大きくなってきます。空の様子は西側が雲におおわれていて、東側の残った三分の二程の空は晴れていて、きれいに仕切ってあるような具合です。それは雲の中か、真下にあったようです。私はべったり道端の金網に寄りかかってしまい、「えっ！信じられない。まさか?」と思いました。すると再び星のように小さくなって消えそうになりました。あわててテレパシーを送るつもりで「私はアダムスキーを信じています！ ホワイトサンズ事件も信じています！ 火星から来たのですか? クロード・ラエルは本物ですか? そばで見たい」と思うと、その光はわぁーっと大きくなって、レーザー光線のような脈動するような動きでカギ型に変化しました。私は感動のあまり涙が出て来て、『読者の声』に以前書かれていた事を思い出し「GAPをご援助ください」とテレパシーを送り、そして思わず右手でその形をなぞっていました。そしてその花はしだいに小さく星のような光体になって消えてしまいました。それはとても感動的な瞬間でした。そして帰りながら、「やっぱりいるんだ。本物なんだ」と一人言を言っていました。「これは何とかしなくてはいけない」などと思い、会いたいと思う物には絶対に出会えるものなのだと思いました。翌日同じ所を見ましたが何もありませんでした。

同年十二月一日（水）午後六時頃、絶対UFOが来てくれる！と思い、いつまでも部屋の窓から空（南側）を見上げていると、飛行機が割合低空を飛んだ後に、光体が三つほぼ同じ所を飛びました。初めの二つは白い物と緑がかった物で点滅していたので飛行機かと思いました。三つ目は点滅しない赤い光体で、途中でパッと見えなくなったので驚いて立ち上がると、少し先で再度現れました。この光体のせいで、その前の物もUFOだったのではないかと思いました。この日の目撃と、本誌74号の末永さんのレポートに影響を受けて、まじめにUFOを呼ぶようになりました。

一九八三年一月十六日（日）午後六時三〇分過ぎ、深呼吸をしながらカーテンを開けて、部屋に座りながら「UFOを見せてください」と空に向かってお願い（妙な言い方ですが、そんな気持ちです）してみました。白っぽい光で六時四十分、六時五十分に現れました。

一月二十三日（日）午後六時頃、雲が出て来たのでこれは無理かなと思いながらも呼びました。なぜかというと、雲が出ていると、かなり低空に降りてこないといけません。この住宅密集地に、まだ人通りの多い時間に降りて来るのは少し人目につき過ぎるだろうから無理だろうなあと思ったからです。なぜ六時前後に呼び出すのかといいますと、しだいに色が移り変わって暮れて行く空を見ているのが大好きなので、いつもこの時刻になってしまいます。そして暗くなると、「さあ、これなら飛んでくれる」という気持ちになります。深夜は寒い為にこの時間に呼びます。この日はそれでも雲のすき間に白い点滅する光体が飛びました。前回同様、東から西へ向かって直進しましたが、今回はかなり上空に現れました。なぜかというと、呼んでいる間に母がテーブルクロスを干しに来たため、仕方なくいつもより上空を見上げていたためで、ちょうど母が布をかけているとき「ああ、これじゃきょうは見えないかなあ」と思いかけたところに現れたのです。あの光体は私の視界を飛んでくれている。そう感じて四十分程呼んでみましたがついに見えませんでした。あきらめて北の窓へリンゴを取りに行くと、今度は赤い針の先程のかすかな光体が、ゆっくりと昇り、東へ飛びました。それを見てまた感動しました。赤と白のライトを点滅した物も西へ向かって飛びましたが、これはかな

り大きくて飛行機のようでした。

一月二十四日（月）午後五時十五分頃これはＵＦＯと違いますが、珍しい事なので書きます。仕事の帰りにちょうど富士山がきれいに見える通りがありますので、ながめるのです。一度チラッと見たとき、また富士山の左上ですが、アダムスキー型そっくりの形をした雲が浮いていました。驚いてもう一度見ると、そのときはもうこわれてしまっていました。かなり大きな雲で、何となく嬉しくなったものです。

二月四日（金）午後五時四十五分。この日の前日に、ビリー・マイヤー事件の本を買い、たまたま休日だったので一日中読んでいました。この本を読む迄は、ビリー・マイヤーも本物だろうと思っていたのですが、アダムスキーは偽善者だと書かれていたので疑問を持ちました。一体何が本物なのだろうと思いつつも、やはりどのコンタクト・ストーリーもアダムスキーが基礎になっていると感じ、やはりアダムスキーは本物なんだと思いながら呼びました。私の部屋は南向きなので南の空に向かってです。この日は、「明日は東京月例会がある日だけれど、もしきょうＵＦＯが出現したら出席しよう」と、軽い決意を持って十五分程呼んでいました。南の建て物の影からかすかなだいだい色の光が昇り、大きくピカーッと光を放ってから再び小さな光になって西へ進み、建て物の影に消えました。このときは「金星から来たんですね？ブラザーズ、教えてください」と聞いていましたが答えはわかりませんでした。

とにかくアダムスキーを信じて呼んだ所に合図を送るかのように光ってくれたので、とても感動しました。

二月五日（土）。この日初めて東京月例会に出席しました。テレパシー受信はできませんでしたがとても素晴らしい会でした。帰りの空を赤い光が点滅する光体がとてもゆっくり飛びましたが飛行機かどうかわかりません。

二月十日（木）。午後六時四十五分頃。この時刻にはとても沢山の航空機が空を飛んでいるようですが、一つはよく見ると赤いライトが五つあるようで、頂点のライトが点滅していました。飛行機かどうかわからなくて悲しくなりました。家へ戻って入口のあたりに来ると、北へ二機白い光体が出現。右側の物は星よりも大きな光で、ほんのわずか上昇していましたが、ほとんど停止しているかと思う程です。左側の光は点滅しながら西側へなぜに上昇し建物の影になりました。残った光体を注目して、見のがさないように階段を昇りながら見ていました。それはゆっくり上昇して、私が母を呼びながら「消えないでください」と頼んでいましたが、上空へ行くに従って赤く変光し、小さくなりました。そしてとてもゆっくり西へ向かって点滅しながら飛びました。母と一緒に見ましたが、衛星でしょうという意見でした。

次は私のテレパシー体験を、わずかですが書かせていただきます。夢予知が数回あります。

一九八二年二月、羽田沖の飛行機事故の前夜に、私の家の北側の窓の前に飛行機の落ちる夢を見ました。翌日、事故のことを知りました。夢を見ていたせいで、あまり驚きませんでした。

同年三月八日、暇ができたら三～四日田舎へ旅行に行きたいなあと日記に書く。翌日、友人から電話があり、全く同じ事を友人が言いました。「田舎の方に三日くらい旅行に行こう」という話です。三月六日に『生命の科学』『テレパシー』『宇宙哲学』を買い求めたばかりのことで、確か『テレパシー』を読んだばかりのときだったと思います。

同年十二月上旬、あまり詳しく書いておかなかったのでどこの、どういった事件だったかは忘れました。朝、目ざめる直前にとてもこわい夢を見ました。私が包丁を両手でつかみ、それを振り降ろして人を殺してしまう夢です。そしてハッハッ息を切らしながら、鏡の前に立って「殺してしまった」と興奮しているところで目がさめました。朝刊にだと思いますが、十九歳の少年が刺殺事件を犯したという記事が載っているのを見て、むしろほっとしました。きっと私はこの夢を見たのだろうと思ったからです。それにしてもこんな夢だけはもう見たくありません。

同年二月と七月。昼間、仕事中にフラフラッとして、「あれ、地震がありそうだな？」と思いました。するとその日の夜に地震があり、これは偶然ではないと思いました。ただし地震はとても多いのですが、私が予知したのはこの二回きりです。

他にも小さな予知がありましたが、主な事はこれくらいです。こういう事からみて、アダムスキー哲学をもっとまじめに探究しなくてはいけないということを感じています。

去年思ったことは、私達が今見て聞いている現象世界は実はずっと過去の物なのかもしれない、ということです。何万光年遠方にある星の光は、何万年もしてやっと見えなくなるもので、今見えていても実はもうない物なのかもしれない。それと同じで、今目の前にあるこの生活も、もしかするともう終わってしまったものを見て、感じているだけなのかもしれない、ということです。そうすると、実は本体の意識の部分はもうずっと先のことが見える所迄行っているのかもしれない。そう考えると予知という物の理由も何となくわかるように思います。本体の意識の部分はやはり、まだわかっていない所を自由に動ける物で、過去へも未来へも行けるのかもしれないと思いました。そうして、少し考え方が楽になりました。

今年になってからはまだ予知はしていませんが、八十号の本誌が着く前夜にＵＦＯの写った写真を沢山見ている夢を見ました。予知夢になって欲しいと思います。

まだまだ未熟な会員ですが、この後も初心を忘れない様にがんばって行きたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。そして、どうか他の会員の方々の体験を掲載してください。

# 異星人イエスの大地へ

久保田八郎

## 日本GAP第5回海外研修「エルサレム宇宙考古学の旅」紀行

**去る八月十二日より二十一日までの十日間、日本GAPは企画第五回「エルサレム宇宙考古学の旅」を実施し、計三十六名の旅行団はエルサレムを中心にイスラエル各地に残るイエス関係や旧約聖書時代の遺跡を見学し、感動と歓喜の旅を終えて全員無事帰国した。これまでの海外研修旅行では最高に素晴らしい旅であったというのが数度参加された方々の一致した意見である。以下はその報告。**

### 出発時の〝奇跡〟

十二日午後三時、成田空港南ウィングに集合した一行は結団式と記念撮影終了後、勇躍アリタリア航空（イタリアの航空会社）のジャンボで六時すぎに出発した。離陸前に、下着類を入れた風呂敷包みが機内の棚の奥にころがっていたのに気がつかず、紛失したと勘違いした私は、イタリア人職員の許可を得てレントゲン検査場まで探しに行こうとブリッジを通ってゲートまで出たところ、GAP会員で空港職員の村山博君（成田市）が立っており、私を見て驚喜しながら花束を渡してくれた。出発を祝うために花束をかかえてゲートまで来たけれども、すでに一同が乗り込んだあとだったので、失望して私の顔を思い浮かべていたら、ひょっこり姿を現したものだから、まさに奇跡だという。いったん機内に乗り込んだ客がまたゲートまで出て来るとは通常考えられないことなのだ。どうやら同君の強烈な想念にひかれて私が出て行ったのだろうとあとで一同で笑いながら話し合う。これは幸先がよいと大いに喜んだ。よしこの花束をエルサレムまで持って行って聖墳墓教会へ供えよう。大切にしなくてはいけない。

機は途中ホンコン、バンコック、デリーに寄り、成田出発後約十一時間にしてローマ空港に着いた。現地時間で朝の八時四十五分である。ここで昼まで待機したが、夜間何度も食事が出たので食欲は起こらない。セ氏二十一度で、かなり涼しい。

午後一時半に飛行機を乗り換えて出発、約五時間後にイスラエルのテルアビブ空港へやっと着いた。日本を出てから約二十一時間におよぶ大旅行だ。これはイタリアのローマまで行って、また引き返すかたちになるからである。パスポート検査所の横の壁を見ると、「テロリストたちによりここで斃れた人々を追悼して」と英文とヘブライ語で書いた銘板がはめこんである。例の機関銃乱射事件の現場なのだ。日本人には痛い。

だが一般のイスラエル人は「あれは特殊な日本人がやったことで、普通の日本人は穏和な民族だ」と考えているから心配する必要はない、と東京のイスラエル大使館の方から聞いていたが、来てみればたしかにそのとおりで、イスラエル人は非常に親日的であることが次第にわかってきた。

空港からバスでエルサレムに向かう。広漠たる茶褐色の平野が展開する。新約と旧約の壮大な歴史を秘めたパレスティナの大地へ来たぞ！と時差ボケのわが身に言い聞かせながら目を皿のようにして風景にみとれるうち、バスはホーリーランドホテル（イースト）に着いた。

### 複雑きわまりないユダヤ民族の歴史

イスラエルについては日本でほとんど知られていない。イスラエル民族の歴史はおろか、イスラエル人とはユダヤ教を信奉するユダヤ人であることや、イスラエルがなぜアラブと仲が悪いのかということまで知っている人はほとんどいない。またユダヤ教の何たるかも知られていない。しかしイスラエル人も日本に関してはほとんど知らないからこれはアイコだと言えるが、旅行記を書くついでに大ざっぱながらもイスラエルの歴史をここで紹介しておくことにしよう。

旧約聖書によると、遠い昔メソポタミヤに住んでいたセム族の一種族がアブラハムという偉大な族長に率いられて当時カナンと呼ばれたパレスティナへ移住してきた。神はアブラハムにこの地を子孫に与えることと、子孫から王を出すことを約束する。これがユダヤ人（現在のイスラエル人）の選民思想となって、イスラエル人は神に選ばれた民族だという自覚を持たせることになる。この移住は前一九〇〇年頃とされている。

その後飢饉のためにユダヤ人の一部はエジプトへ移住するが、後には奴隷として酷使されるようになったので、例の英雄モーゼが前一二〇〇年代にユダヤ人の大部隊をひきつれてエジプトを脱出する。だがしばらくはシナイに滞在して、前一〇〇〇年頃にやっとカナンの地に王国を建設した。その最初の王になったのは預

●成田空港にて。
前列左より＝田中正（添乗）、小林由起子（埼玉）、清水敏恵（山形）、岡本静江（奈良）、野本俊次（東京）、清水勝一（茨城）、橋口真市（静岡）、鈴木芳美（静岡）、野口敏治（静岡）、池谷由貴子（三重）、
中列左より＝久保田八郎（東京）、升田裕子（広島）、小沢アユ子（愛媛）、井口みい子（東京）、坂野美津子（北海道）、高梨和明（静岡）、高梨美幸（同）、赤池澄夫（静岡）、清水悟（長野）、遠藤昭則（千葉）、三浦公子（広島）、
後列左より＝白川裕基（秋田）、斉藤康美（大阪）、石川敏雄（東京）、井川博文（神奈川）、山城尚雄（栃木）、清水正（山形）、篠芳史（神奈川）、吉原逸人（栃木）、橋本明（栃木）、千田光明（神奈川）、河辺宏幸（愛知）、今西行雄（神戸）、磯目三鶴（東京）、品野友一（埼玉）、伊藤達夫（愛媛）、〈計36名〉

言者サムエルに油を注がれ、ペリシテ人の侵略を撃退したサウルである。

その後ハンサムな武将ダビデがサウル王戦死のあと王位を奪い、統一イスラエルを治めてイスラエル史上最大の王国を築く（前九九八年）。この子ソロモンが三代目の王になってからイスラエル人の王国は頂点に達した。エルサレムに壮麗な神殿を築いたが、この王、正妻が七百人、側室（メカケ）が三百人いたというから、話半分としても栄華のほどがしのばれよう（列王紀上11・3）。これを第一神殿期という。

ソロモン王が四十年の治世を終えて他界した後（前九二二年）、王国は北のイスラエル王国と南のユダ王国に分裂したが、北は前七三二年にアッシリアに、南は前五八七年にネブカドネザル王のバビロニア帝国に征服されて、ユダの市民一万人はバビロンに連行される。これがバビロンの捕囚といわれる名高い事件である。しかしバビロニアはペルシア帝国に滅ぼされて、ユダヤ人はエルサレムへ帰還し、荒廃した神殿の再建にかかる。これを第二神殿期といい、実質的には後世のヘロデ王によって大修復が完成する。だがこれも紀元七〇年のユダヤ戦争でローマ軍により徹底的に破壊されて、現在は〝歎きの壁〟だけが残っている。

さてペルシア帝国が衰退してからマケドニアのアレクサンドロス大王が台頭したが、その死後、エジプトのプトレマイオスとシリアのセレウコスの両将軍がパレスティナを侵攻し、しばらくはセレウコス朝の支配が続くが、後にマカベア家（ハスモン朝）が王国を目指して独立の道を歩んでいた前六四年に、強大なローマ軍がエルサレムを襲う。当時子供だったヘロデはガリラヤ総督となり、前四〇年にローマによってユダヤ人の王に任命される。マカベア家の娘を王妃とした彼は後には王妃を殺すほど猜疑心の強い残忍な男で、この王の治世下にイエスが誕生したのだが、この幼児がユダヤ人の王と呼ばれていると聞いて激怒し、二歳以下の男児を全部殺害させたので、マリヤとヨセフは幼いイエスをかかえてエジプトへ逃れ、そこにしばらく滞在した。

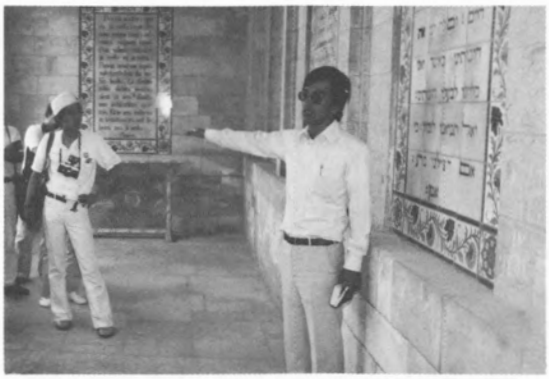
イエスという史上最大の栄光と悲運とに生きた偉人が活躍したのは、ヘロデ王の息子ヘロデ・アンティパスの治世下である。

以上、アブラハムよりヘロデ時代までのおそろしく複雑な歴史をごく簡単に述べた。紙面の都合によりそれ以後の経過は省略しよう。問題は二千年前のイエスの足跡を訪ねることにあるのだ。現代までのイスラエルの歴史ともなれば、気が遠くなるほど繁雑になってくる。

また私たちがイエスを重視するのは、この偉大な指導者が宇宙の法則を伝えるために金星から地球へ転生してきたというスペース・ブラザーズの説明を事実と考えているからである。私たちはキリスト教徒ではないし、宗教とは一切無関係な立場にある。したがって、GAPは宗教的だという批判は妥当ではない。私たちは宇宙哲学とUFO問題の探求者である。そしてその基盤を科学においているのである。

## ガイド・榊原師

さてホテルでの夕食後、現地在住のガイドさんに紹介された。この方は東京出身の榊原（さかきばら）茂先生で、日本の大学を二つも出て神学を学び、後にエルサレムのヘブライ大学の大学院で学んだけれども、なおあきたらず、ついにはイエスの遺跡を探索しながら野宿をして歩き、ガリラヤ湖ではペテロやヨハネを偲んで漁師までやったという方で、大師の精神を肌で吸収しようと努力したという。お金ができると外国へ伝導に行き、エルサレムへ帰るとガイドとして働いて生活費をかせぐというまれに見る傑出した人物であることが次第にわかってきた。宜教師の資格



▶榊原師（右）

を有する方で、ただのガイドとは違うのだ。当初は日本語の達者な現地人ガイドさんの予定だったが、その人が急病で来られなくなったので、急拠榊原師にかわったのだが、これが幸いした。このために私たちの旅がこよなく有益な楽しいものになったのである。榊原先生はエルサレム在住十二年、ヘブライ語と英語が達者で、奥さんはオーストラリア人、可愛い小さなお嬢さん二人がある。「日本で学んだ神学は何にもならなかった。遺跡から何かを学びとらねばだめだ」と言われる。さもありなん、だから私たちも毎年海外の遺跡を見て歩くのだ。

## 書物よりも現地へ

十四日、快晴下のすがすがしい空気を吸いながら八時に全員がバスで出発する。当初の予定ではまっ先にビア・ドロローサ（嘆きの道）と聖墳墓教会へ行くはずだったが、今日は日曜日のため教会が閉じられているので、コースを変更して、まずオリーブ山へ登り、展望台からエルサレムの旧市街を一望する。一点の雲もない蒼穹のもとに四千年の歴史を秘めた茶褐色の古代の石造都市が眼下に展開する。素晴らしい風景だ。榊原先生の説明後、カメラを手に眺望すると、長い人生の旅路の果てにやっと懐かしい故郷にたどり着いたという感慨に満ちて、全身が感動に打ち震えるのをどうすることもできない。これがエルサレムか、夢にまで見たエルサレムなのか。「ああエルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、あなたに遣わされた人々を石で打つ者よ。めんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしも幾度人々を集めようとしたことか。それなのにあなたがたはこたえようとはしなかった」というマタイ伝のイエスの言葉をくちずさみながら、しばし佇立して眺め渡し、二台のカメラで撮りまくる。全市街が日光を正面から浴びているのであらゆる建物が鮮明に写るような時間帯だ。これは考古学的な記録写真として絶好の日照角度である。夕暮れどきの影を多くつけた写真のほうが芸術味は増すだろうが、記録写真としては不向きだ（**24頁の写真**）。

▲オリーブ山からエルサレムを望見する。

手前の金色の岩のドームがひときわ美しく輝いている。そのずっと後方の灰色のドームが聖墳墓教会で、ここがイエス処刑のゴルゴタの丘の跡だという。ヘロデ王時代の頃はもっと小規模な都市だったのだろうが、今は新市街を加えて大都市に変貌しつつある。しかし近代的なビルは少なく、全体が古代中世そのままという感じだ。この風景はスペイン中世の都市トレドを高台から見おろしたのとよく似ている。しかしエルサレムはトレドよりも古めかしくて、もっと古代の町という印象を受ける。

約三十分いた後、山上のエレオナ教会へ行く。これは四世紀の初めローマのキリスト教改宗者コンスタンティヌ帝がパレスティナに建立した三つの教会、すなわちベツレヘムの生誕教会、エルサレムの聖墳墓教会、エレオナ教会の一つであり、ここでイエスが有名な祈りの言葉、「天にましますわれらの父よ、願わくば――」を弟子たちに教えた場所という。教会の廊下には世界四十六カ国の言語で書かれた祈りのパネルが掲げられて壮観だ。榊原先生がヘブライ語の祈りを大声で読みあげる。日本語の祈りのパネルは祭壇近くの壁にある。見ると「天においでになるわたしたちの父よ。み名が聖とされますように」と、えらく口語体になっている。

ここにはイエスが弟子たちに祈りの言葉や世界終末論に関する意見などを述べたという洞窟がある。先生の説明によると、イエスはナザレという田舎の出身なので都会地を好まず、よく洞窟を利用して暑気を避けながら弟子たちに話したという。

ここで洞窟というものが重要な意義を帯びてくる。イエスの生まれた馬小屋も実は天然の洞窟であった。石炭岩の多いパレスティナには洞窟が多く、古代はそれを住居に使用したのである。したがって日本人は馬小屋というと粗末な木造の堀立小屋を想像するけれども、実際は普通の洞窟住宅であった。人が多くて洞穴の客室に入れなかったヨセフとマリアは付属の馬屋の中でイエスを抱いて宿泊したのである。こうした実状も現地へ行かないと容易に把握できない。日本で聖書を読んで空想にふけるだけでは幻想や童話の世界しか浮かんでこない、ということをいやというほど感じさせられた。

またこちらではあらゆる遺跡をかたっぱしから教会の建物で覆っているが、これはむしろ風雨をよけるための保護作用をなしてよいだろう。

## オリーブの木は目撃証人？

次に四百メートル離れた昇天教会へ行く。ここでイエスが復活後に天へ昇ったという伝説がある。昔ローマの貴婦人が建てたが何度か破壊され、十二世紀にアラブ人がモスクにした。八角形の小さな教会の上部はドームになっており、内部にはイエス昇天時の足跡だという岩が四角い囲みの中に保存されている。長さが四十センチもある足跡はどうみても不自然だ。しかしイエスの頃はこの山中は荒涼たる地帯だったろうから、円盤が着陸するには絶好の場所だったにちがいないと思いながら外へ出る。

かなりな暑さだが、こちらの空気は乾

燥しているのでさわやかだ。日陰に入ると涼しい。

山を降りて今度は山麓のゲッセマネへ行く。イエスが逮捕される前に夜通し祈った場所として名高い。さほど広くはなく、見たところ二百坪ぐらいだろうか、園内には八本のオリーブの老樹があり、柵があって中へは入れない。植物学者によるとオリーブの木は枯死することがないので、これらの巨木は三千年を経たものかもしれないという。そうだとすれば、これらの老樹はイエスや弟子たちの行動を目撃していたということになる。オリーブの木をバックにして全員記念写真を撮る。

ここには近代に建てられた万国民の教会と呼ばれる立派な建物があり、その内部にはイエスがよりかかって祈ったという大きな岩がある。ここでもこの岩の上に教会を建てたわけだ。こうしてエルサレムは教会だらけだが、京都の寺院とちがって、いちいち入場料を取らないので維持費は大変なものだろう。どのようにしてまかなっているのかを先生に聞こうと思いながらついに忘れてしまった。

▲ゲッセマネの庭園。

次にシオン山の中腹のバプテスマのヨハネ教会へ行き、ここでも奥の洞窟を見て十一時頃にホーリーランドホテル（ウエスト）へ行く。ここの広い庭にはヘロデ王時代のエルサレムの大神殿と城壁に囲まれた市街の五十分の一の大模型がある。ヘブライ大学のアビ・ヨナ教授が製作したもので、二千年前に逆もどりしたかのような錯覚が起こるほど精巧に作ってある。この壮大なエルサレムのミニ城壁都市は綿密な考証のもとに再現させたもので、わが国のへたな都市よりもはるかに近代的な様相を呈している。この市街にバスや電車が走っていてもおかしくはない。だがこの栄光ある町も七〇年にローマ軍により徹底的に破壊されることになる。そしてキリスト教帝国となったビザンティン・ローマ帝国にとって聖地化したエルサレムをめぐり、以後数百年すさまじい争奪戦が続くのである。

このあとイスラエル博物館へ行く。これはアメリカのロックフェラー財団の寄付金で建てられたもので、この中の書物殿には例の死海写本がある。円型のガラスの中に展示されているイザヤ書六十六巻は本物そっくりに作った複製品で、本物はヘブライ大学に秘蔵されているらしい。その他『光の子と闇の子の戦い』の古文書やガラス製の立派な鉢、青銅製の鏡やスプーンなどがある。すべてクムランの洞窟から出土したものだ。

▲ヘロデ王建設エルサレムの大模型。

この写本を見たわが旅行団の一メンバー（女性）が、「この写本は遠い昔、クムランにいた頃、わたしが書いたものであることを思い出した」と言う。つまり二千年以上昔の過去世の記憶がよみがえったということらしい。そういう人がGAPメンバー中に存在しても不思議ではない。むかしある方面から聞いたところによると、二千年前のイエスのグループやクムラン教団に属していた人々が、さまざまの転生を経て、現在日本GAPの会員になっているという。その人数や現在の氏名は不明だが、過去世の強い記憶を持つ人が現地へ行けば、前記の例のごとくよみがえるかもしれない。

## きびしい律法で生きるユダヤ人

十二時半にシオン山上のレストランへ入り、昼食をとる。セルフサービスだが量が多く、バラエティーに富んで美味しい。しかしハエが多い。ビールを小ビン一本飲む。イスラエルのビールはすごくうまい。コクがあって舌ざわりがよく、いくらでも飲めそうだ。これからみると日本のビールはひどく水っぽい。こちらにはゴールドスターとマカビーの二種類のブランドがあるようだが、いずれも甲乙つけがたい。

ただしユダヤ教のきびしい律法を守って数千年間あらゆる迫害に耐え抜いてきたユダヤ人は、酒類をあまり飲まない民族だという。酒の飲めない榊原先生が婚礼の席に呼ばれて無理してビールを飲み、酔っぱらったら、周囲のイスラエル人たちから軽蔑されたということだ。この話には打たれるものがあった。

ユダヤ教というのは旧約聖書の初めのモーセ五書といわれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を経典として信仰する宗教で、モーセの十誡を中心とした多くの律法と、律法学者による注解の集大成であるタルムードによって祈祷や日常生活を厳格に規制する。神は絶対唯一神のヤハウェである。そして現代イスラエルの人口四百万のうち、三百万弱のユダヤ人がユダヤ教徒、百万がイスラム教徒で、キリスト教徒はわずかに

一万人強しかいない。これはユダヤ人がイエスを救世主と認めていないからだ。

## 事実と絵画との相違

続いて私たちはシオン山南西のチェナクルームと呼ばれる、俗に二階座敷といわれる部屋へ行った。これこそイエスが十二弟子と共に最後の晩餐を催した場所で、こんな部屋が残っていること自体驚くべきことである。二階座敷というのは階下がダビデの墓とされており、その階上にあるからだ。

▲最後の晩餐の部屋。中央に立つのは筆者（伊藤達夫氏撮影）

内部はかなり広くて部屋というよりも石を敷いたホールである。三十坪はあるだろうか。中央辺に太い柱が二本ある。ここでイエスのグループは食事をとったのだが、レオナルド・ダ・ビンチその他の画家が描いた名画では、やみくもに横に細長いテーブルがあって中央にイエスが椅子にすわり、左右に弟子たちが並んでいる図ばかりだが、これらはすべて空想の産物で、イエスの頃のユダヤ人の習慣としては、床の上に体を横にして寝そべるような格好で食事をしたのだと榊原師が語る。したがって弟子たちはイエスの体の周囲に群らがるようにして横たわりながら「裏切者はだれですか」と聞いたのである。中世の絵画にまどわされてはならない。

## シロアムの池の奇跡

このあと付近のシロアムの池へ行く。これは昔、自然の湧水であるギホンの泉の水をアッシリアの侵攻にそなえて造られた地下水道トンネルで城内に引いた貯水池であった。元は大きな池だったようだが、今は幅二メートルばかりの小さな池になっている。

ここで榊原師はイエスが生まれつきの盲人を奇跡的に癒やしたというヨハネ伝を朗読された。弟子たちが「この人が生まれつき盲人なのはだれが罪を犯したのか、本人か、それともその両親なのか」と尋ねる。つまりカルマはだれが作ったかというわけだ。イエスは答えた。「だれが罪を犯したのでもない。ただ神のみわざが彼の上に現れるためである」と言って、地面にツバを吐いて泥を作り、それを盲人の目に塗って、シロアムの池に行って洗えと命じた。そこで池に行って洗うと目が見えるようになった。

▶シロアムの池

私は榊原師の話にいたく感動した。ヨハネ伝にこの物語があることは知っているが、いま現実にその池のそばに立つと、盲人の歓喜の声が響いてくるような気がする。

## 羊飼いたちに知らせた〝天使〟とは

二時三十五分にバスでベツレヘムに向かって出発した。約八キロ離れたイエスの誕生地である。前述のとおり生誕の場所は洞窟であり、ここもそれを覆って降誕教会と呼ばれる巨大な建物がそびえている。中へ入ってみると洞窟の部分は祭壇になっており、その下に飼葉桶にされていたという聖洞穴がある。横の礼拝堂では坊さんたちが大声で経文をとなえている。まるで歌をうたっているように響く。

この降誕教会の北側に接する聖カタリナ教会の地下にはいくつかの洞穴室があり、ここにヘブライ語聖書をラテン語聖書に翻訳した偉人のヒエロニムスが四世紀から五世紀にかけて住んでいたという洞穴がある。榊原師の説明によるとその功績のかげには立派な女性の援助があったという。

師の説明の声が響く背後に礼拝堂に集まった男女信者のうたう賛美歌が美しく流れてくる。素晴らしいBGM（バックグラウンドミュージック）だ。六年前にフランスのルールドを訪れたとき、ベルナデットが礼拝にかよったというバルトレスの教会から響いてきた賛美歌にひどく感動したことを思い出した。宗教には無縁だが、外国の教会から流れてくる無名の民衆の賛美歌の斉唱を聴くと、なぜこうも胸が熱くなるのだろう。

このあと、イエス生誕前に天使が羊飼いたちに聖降誕を告げたという羊飼いの野の教会へ行く。羊を保護するために用いた洞窟が中にあり、教会のモザイク床にはイスラエルで最も美しい初期キリスト教のモザイクが残っている。周囲一帯にはダビデ時代そのままの茶褐色の平野が展開し、旧約時代の面影を残している。続いて天使のチャペルへ入って見事なフレスコ画を見る。羊飼いたちが聖なるキリストが誕生することを天使たちから知らされる図だ。この〝天使〟とか東方の三博士を導いた〝星〟というのは円盤ではなかったのか。そう考えぬと合点がゆかない。おそらく野原に着陸して、出てきた異星人（ブラザーズ）が羊飼いたちに告げたのではなかろうか。

これでこの日の見学を終了し、ベツレヘムの町のラマ・ブラザーズという民芸品店で若干の土産物を買う。こちらではオリーブの木で作った小物や彫刻が多い。

ホテルに帰って夕食をとったあと、十数名で旧市街へ散歩に出た。城壁内に入り、古い石だたみの狭い道を歩いて行くうち、壁の英文標示によって、これがなんとイエスの十字架の道、ビア・ドロローサであることがわかった。人気のない暗い道は薄気味わるく、途中から引き返した。

## エルサレム上空にUFO出現！

私たちGAP旅行団が海外へ出かけると必ずといってよいほどどこかでUFOが出現する。十三日の夜もエルサレムのホテルの屋上で野口、高梨、橋口の三氏が九時二十分から十時三十分頃までの一時間、夜空を観測中、オレンジ色の光体が水平に飛ぶのを数回目撃した。赤池、鈴木の両君も十三日夜、十時すぎから十二時半までの間に十回の光体を見たという。以下は野口氏の手記である。

「十四日の夜は静岡支部男性メンバー五名で屋上に行き、再度試みることにした。この日は各自が十分間ずつテレパシーで送念し、他の人はその間黙って空を見ていることにきめた。すると五名全員の送信に答えて光体が出現した。八時四十五分から十一時まで行い、合計十二回出現した。十五日も同様五名で屋上に行き、九時から十一時三十分まで観測を行い、合計十回の出現があった。

十六日の夜はイスラエルの民族舞踊と音楽を観賞したあと、十二時近くにホテルへ帰って五名で屋上に行き、二時近くまで観測したところ、五回出現した。エルサレム滞在の四日間連続してUFOが出現したことは予想もしない驚異的な出来事だった」

野口氏の話によると、テレパシーで呼びかけるとやがてオレンジ色の光体が出現する。しかしすぐに戦闘機が飛んで来て追跡するので、光体の出現時間は短いという。どこかで空軍がレーダーで探知するらしい。イスラエルは警戒がきびしいのだろう。

他にも坂野美津子さん（函館）がテルアビブからローマへ飛ぶ旅客機の窓からオレンジ色の円盤三機がジグザグに飛ぶのを目撃している。これは伊藤達夫（愛媛）、清水勝一（茨城県）の両氏も確認した。こうした素晴らしい目撃事件が今回の旅でも発生したのだ。日本GAPがスペース・ブラザーズから注目されているというのはけっして誇張ではない。

## 鶏鳴教会の地下牢

翌十五日もすごい快晴で、気分がよいものだから、予定を少し変えて、前日と同じオリーブ山の高台から再度エルサレム市街を眺望することにした。いつまで見ていても飽きのこない壮麗典雅な風景だ。ここになんと四十五分間もいた一行はオリーブ山と別れを惜しみながら九時に山を降りてゲッセマネを通過、ダマスクス門の前を通り、新門、ダビデの塔を見ながらシオン山の鶏鳴教会へ行く。

この教会は大祭司カヤパの公邸跡に建てられている。イエスがゲッセマネで逮捕されたあと、この公邸まで連行されたとき、ペテロもついてきた。そして中庭で下役どもと一緒にすわっていると、邸の女中がペテロにむかって、あんたもあの男（イエス）の一味だろうと聞くので、ペテロはあわてて三度も否定した。するとニワトリが鳴いた。それで「ニワトリが鳴く前に三度わたしを知らないと言うだろう」というイエスの予言を思い出して、外に出て激しく泣いた。ここがその場所である。それで鶏鳴教会と呼ばれるのだ。

裏へまわると古い石段がある。この石段こそイエスが連行されたときに間違いなく歩いて降りたものだと榊原師が説明し、かつて師はこの石段のそばで野宿したという。こんな重要な石段が無造作に残されているのに驚くほかはない。

▲イエスを閉じ込めた岩窟室

この教会はこの日が八月十五日のため年に一度の祭礼があるとかで、この日に限って中へ入れなかったのだが、かつて榊原師がこの教会で働いて神父さんを助けたことがあるので、恩義を感じた友人の神父さんが特別に入場の許可を与えてくれた。人というものは助けておくものだと言いながら師が先導して地下の岩窟室へ一同を案内する。これは磔刑の前に、イエスが一夜閉じ込められた留置場だという。六帖ばかりの狭い方形の室に入って上方を見ると径五十センチばかりの穴があいている。そこからイエスの体を綱で吊り下ろしたのだという。こんな場所が残っていたのか！　驚異と感動と好奇心が交錯するなかを師の話を聞いているうち、「久保田先生、あなたはちょうどよい場所に立っておられる。ちょっとそこをのいて下さい」と師が言われるので体を動かすと、私がもたれていた壁に黒い人影のような跡がついている。これは謎の人影らしい。

このとき超能力者の遠藤昭則君（千葉県）はその黒い人影の左寄りの壁を見つめていてある光景を透視した。それは黄金色のオーラを放つ人間の姿のようなもので、その彼方に山並と地平線らしきものが見えたという。イエスの放った残留波動を感じたのか――。

ここで一夜イエスは何を考え、どのような姿勢ですごしたのだろう。イエスの肉体が空間に描いた軌跡と私たちのそれとはどこかで交錯しているにちがいない。いささか茫然としてたたずむ。

十時にここを出て、いよいよ城壁の門

から入り、岩のドームの内部を見学する。奥に巨大な岩が保存してある。これは大昔アブラハムが息子イサクを神への犠牲に捧げようとした岩だといい、またマホメットが昇天した岩だともいう。

## 聖墳墓教会の十字架の穴

そのあとステパノの門を通り、ベテスダの池を見てから、いよいよエルサレム最大のハイライトであるビア・ドロローサへ入る。まずアントニア要塞跡へ入り榊原先生の詳細な説明を聞く。ここの地下にはローマ兵がイエスを侮辱したという広い石だたみの床が二千年前そのままの姿を残しており、兵隊たちがサイコロ遊びをやった場所にゲーム板として使った図形のようなものが彫り込んである。

外へ出てイエスが十字架の横木をかつがされて歩いたビア・ドロローサ（嘆きの道）を私たちも歩く。前夜見た閑散たる光景とは異なって、狭い道の両側にはアラブ人の土産物店が無数に立ち並び、各国の観光客がひしめいている。喧騒と異様な臭気の満ちる幅二～三メートルのこの小道は、先頭を見失わぬように急いで歩くのが精一杯で、さっぱり感傷的気分は起こらない。イエスが最初に倒れた第三ステーションで全員の記念写真を撮るのに、三脚などを立てる余裕はないから、榊原先生にシャッターを切ってもらう。ベロニカがイエスにスカーフを差し出して血と汗をふいたという第六ステーションは、オヤ、こんな所なのかと思うほど何の変哲もない。やはりここは人気のない深夜に来るべき場所だ。

約五百メートルの嘆きの道をやっとの思いで通り過ぎて、終点の聖墳墓教会へ入る。階上へ上がると、奥の薄暗い祭壇の下に丸い穴がある。この穴の下にイエスの十字架の柱が立っていた跡があると先生が説明するので、しゃがんでのぞき込むと、あった！ 岩をくり抜いた一辺四十センチぐらいの四角な穴が見える。つまりここはゴルゴタの岩の丘そのものであって、それを覆うように教会を建てたのである。イエスがかついだのは十字架ではなく、横木だけで、タテの柱はあらかじめ刑場に立ててあったのだ。当時の磔刑罪人は横木だけをかついでやって来たのだが、それにしても重量は四十キロを超えるだろう。

この穴の上にはイエスが十字架にかけられた大きな像が建てられて、ケバケバしい祭壇がしつらえてある。ドス黒い陰気な雰囲気だ。偶像崇拝の最たるものではないか。これではユダヤ数徒からキリスト教が蔑視されるのも無理はないだろう。

▲エルサレム城壁前広場にて。右端の壁は“歎きの壁”。

▲嘆きの道のイエスが最初に倒れた場所。

## もう一つのゴルゴタの丘

アラブ料理店で昼食後、もう一つのゴルゴタの丘といわれるゴルドンの丘へ行く。この岩山の中腹にはさながら髑髏を思わせるような凹凸があり、この付近の岩の墓が古代の庭園の中にあるところから、ヨハネ伝に「イエスが十字架にかけられた所には一つの園があり――」とある部分に符合するので、こちらの方が本当のゴルゴタではないかという説が生じて論争の的になっているという。私たちはアリマタヤのヨセフの庭園だったのではないかというこの庭でしばし休憩し、全員の写真を撮ったりした。あとで遠藤君に尋ねてみると、聖墳墓教会の十字架の穴をのぞいたときは紫色のオーラが見えたけれども、こっちの墓では何も感じないと言う。私自身は聖墳墓教会の十字架の穴をのぞいた頃からイエスの死に関してある大きな疑問が生じたのだが、ここでは省略しよう。

## 緑豊かなガリラヤ湖畔

紙数が尽きそうなので、以下簡単に記すと、十六日は同じく快晴下を一同バスでまずベタニヤのラザロの墓へ行き、そのあと広漠たる大平原中のハイウェーを飛ばして死海のほとりのマサダを見学。これは二百四十メートルの岩山の頂上の要塞跡で、ヘロデ王が築いた要塞に紀元六六年からたてこもったユダヤ人九百六十名がローマ軍を相手に三年間死闘を続けて、最後は全員壮烈な自決をとげた場所。ケーブルカーで登って二千年前の遺跡を見る。眼下に死海が広がって眺望絶佳。この戦闘と最後の模様についてはヨ

▲マサダの要塞をバックに。

セフスの『ユダヤ戦記』を読めと榊原師が言う。ここを降りて死海のエンゲリという海岸で海水浴。塩分が濃いので絶対に沈まない。ただし私は海に入らなかった。

そのあと三時半頃、クムラン洞窟とクムラン教団の住居遺跡を見学し、次に世界最古の都市エリコの遺跡を訪ねる。ここでガーナの黒人兵の一隊に出会う。きわめて親日的だ。付近のアラブ人のレストランで絞りたてオレンジジュースを飲む。実にうまい。店のアラブ人の若い男三人がタイコを叩き、歌をうたって大騒ぎをやる。底抜けに陽気な人々だ。

エルサレムへ帰ってからは最後の夜というので全員正装して夕食会を開催し、そのあとハンという劇場へ行き、イスラエルの民族舞踊と歌を観賞する。踊りはかなり動作の激しいもので、歌はマイナーの曲が多くて哀愁を帯びている。

十七日は全員荷物をまとめてエルサレムをおさらばし、バスでガリラヤ方面に向かう。山々はオリーブと白い石垣の連続で、旧約の世界のまっただ中を走るような錯覚が起こる。十時にヤコブの井戸を見る。深さ四十二メートル。ここでイエスは村の娘に教えさとした。昼前にメギドの要塞跡を見学、古代の長い水道トンネルを通る。十二時四十分にナインの村を通過。イエスが一人の息子をよみがえらせた場所。このあたりは赤屋根に白壁の家が多い。一時十分にガリラヤ湖が見えるあたりに到着。マグダラの村を通る。オレンジやアボカドの木が繁茂し、緑豊かな土地だ。一時二十分に湖畔の大きなレストランで昼食、三時五分に遊覧船で湖上へ出る。ヨルダン側の岸が彼方に薄黄土色にかすんで絶景だ。アメリカの黒人のクリスチャン巡礼団が一緒に乗ってにぎやかになる。三時五十分にカペナウムに上陸して古代シナゴーグ（ユダヤ教会堂）遺跡と漁師であった聖ペテロの家の跡を見る。漁師といっても網元だったのだろうと先生が説明する。四時半頃付近のタボカの教会を訪問。イエスが五つのパンと魚で五千人をやしなったという伝説の場所。教会内にイエスが立ったという岩が少しのぞいている。

次にバスで山上の垂訓教会へ行く。ここはイエスが「幸いなるかな心の貧しき者よ――」と説教をした丘。八角形の美しい教会が建立されており、裏の回廊から美しいガリラヤ湖が眼下いっぱいに広がる。素晴らしい風景だ。

このあと湖畔のキャンプ地へ行って一同日本式の野外パーティーを開催。石川敏夫氏のご尽力で米、ミソ、ショーユ、日本酒、焼酎、ソーメン、その他沢山の材料を日本から携行した日本人の宴会はパレスティナの歴史始まって以来の珍事だろう。実に愉快な一夜をすごした。夜はキブツの経営するホテルに宿泊する。

十八日も空に雲はない。カナの町に入り、教会へ入る。ここはイエスが水をワインに変えたという奇跡の場所。岩をくり抜いたワイン溜めなどが残っている。やがてナザレの町に到着。イエスが幼少年時代をすごした所。今はマリアの井戸を含む聖告知教会と、別な泉のあるギリシャ正教会を中心とする大きな都市になっている。アラブ人の居住地へ行くと俄然不潔になり臭気がただよってくる。白人系のイスラエル人とアラブ人の差をいやというほど感じさせる国だ。

二時にシャロンの広大な平野を通過。三時にカイザリアの町へ入り、ヘロデ王が建設した古代の円形劇場を見る。敷地

▲クムラン洞窟の前で。

▶ガリラヤ湖。向かい側はヨルダン。

▲ナザレの町

▲エルサレムのホテル前

▲山上の垂訓教会

▲ローマのサンピエトロ大寺院

の入口にローマ字でピラトの名を刻んだ石柱あり。海中から発見された物で、これによりイエスを死刑にしたピラトの実在が証されたという。ペテロはこの町で説教をやり、キリスト教が世界に広まる原点となった。海岸にはローマが築造した巨大な水道橋が残っている。四時にヤッフォを通って五時近くテルアビブの町に到着後、またヤッフォへ引き返し、港の丘を散策。美しく着飾った新婚のカプルが次々と路上に出現して一同大喜び。テルアビブのホテルシナイに入り、夕食後十数名で海岸へ行き、砂浜に円陣を組んで日本酒を飲みながら歓談。

十九日午前中は自由行動。数名の人とテルアビブ市内へ買物に出る。五時半にアリタリア機でローマに向かって出発。テルアビブ空港内の売店にある電気製品とカメラはすべて日本製。八時四十七分にローマ空港着。夜遅くホテル入り。

二十日は午前中バスで市内観光。トレビの泉、サンピエトロ大寺院、フォロロマーノ、コロセウム等を周遊。これで名所遺跡見学はすべて終了し、十二時半発アリタリアのジャンボで故国に向かい、二十一日の午後二時半に無事成田空港に帰着した。

全く素晴らしい旅だった。参加者各位とご支援を頂いた全GAP会員の方々に深く感謝する次第である。

× × ×

## 付記

■旅行中、添乗の田中氏から聞いたところによると、ガイドの榊原先生が同氏に向かって、今まで扱った旅行団のうちで日本GAPが最高に優秀であると語ったという。これはメンバーの方々の抜群の奉仕精神と高度な協調性のたまものである。毎回GAP旅行団は現地のガイドさんから賞賛の的になるのだが今回もそうだった。

■私のカメラバッグには必要最少限度の品を詰め込んだつもりだが、それでも十キロになった。難儀している私を見るに見かねて篠芳史氏（東京月例会司会者）がずっとかついで下さったので大助かりした。氏の高貴な精神にあらためて厚く感謝する次第である。しかし来年度の旅行からはもっと賢明に考えて軽いカメラを使用するべきだと大いに反省した。二・五キロのホースマンではくたびれる。

■また今度の旅行で旧約、新約、ユダヤ史などの勉強不足を痛感し、帰国してから『ユダヤ戦記』その他を読む有様だった。以前何度も読んだイザヤ・ベンダサンの『日本人とユダヤ人』をあらためて読み直すと大変よく理解できて実に面白かった。そして榊原師の説明もあって、〝金に汚いユダヤ人〟というイメージを根本的に払拭する必要を感じた。

■古代からあれほどに立派な律法を信奉しながら残虐な迫害と殺戮をこうむり続けてきたユダヤ民族なるもののカルマとはどのようなものなのか。これについてはいずれ稿をあらためて詳述しよう。

■イスラエル人が非常に親日的であることに感銘を深めた。またイスラエル国内は日本と同じほどに治安がよくて安全である。これはこの国が軍事大国で強力な防衛態勢をしいているからである。

# イスラエルの旅の思い出

（原稿到着順に掲載）

## 素晴らしい日々をすごした！

静岡県　鈴木芳美

今年の旅行に参加させて頂きまして、まことに有難うございました。こんなに素晴らしい毎日を皆さんと一緒できましたことに感謝しております。

旅の余韻が今でも残っており、思い出すたびに旅に出てよかったなと、ひとり言を言う時があります。旅のすばらしさを今回ほど強く感じたことはありませんでした。狭い殻から飛び出て広大な世界に目を移していろいろな国の人たちの生き方を見ることのすばらしさ、自分の求めているものが少しづつわかって来るようです。

イスラエルでは人々のおおらかさにすっかり魅了されてしまい世界に出れば学ぶことは無数にあり、日本だけにいては絶対にそれはわからないと思います。未知の国を訪れて異人種や文化に接することは人間の成長にとってとても大切な学習であると思います。本で得た頭の中だけの知識ではなく体から学びとった体験がなければなんの価値もなく、今回の旅は体験そのものであったと思っています。

ガイドの榊原先生は私にとても良き影響を与えてくださり、スペース・プログラムを遂行していくうえで励みとなりました。

イエス様のすごされた土地だけに毎日が感激の連続であり、聖書の世界に生きているようになることもありました。

今改めて聖書に目を通してみると以前とは違った感覚で捉えられるようになり現地を訪問できたことは最高の喜びであります。

最後に久保田先生、田中様、同室の赤池様、旅行に参加された皆様方、スペース・ブラザーズの方々に心からお礼申し上げます。

## 大師の波動の満ちたガリラヤ

東京　石川敏雄

夢が現実の形態としてあらわれ、感動の自分をイスラエルの地に見いだした。イスラエルについに来た、といった感じである。不思議にも異国という違和感がまったく起こらない。何かなつかしい所にふたたび来たという感じがしてならない。そしてイスラエル人の瞳の中に人なつこい優しさを見てからというもの特にそうである。この感じはイスラエル滞在中あちこちで感じられた。偉大な歴史を持ちながらも、長い長い流浪の旅からもどって建国に燃えるイスラエル人のパレスチナ魂には、日本人の大和魂にどこかある部分で共通する何かを感じさせられるものがある。

エルサレムにて。オリーブ山から見るエルサレム市街は絶景の一語につきる。歴史の重み、美しさと変化にとんだ地形、そして偉大な大師イエスの面影が偲ばれる所として最高のフィーリングを感じる。とりわけ師が歩かれたという鶏鳴教会脇のなだらかに下る石段を見ていると、師のみ姿が瞼に浮かんできて胸に熱いものがこみあげてくるのを覚える。

ガリラヤ湖にて。緑なす大地におおわれたエメラルドグリーンの湖水は、豊かさを含む地中海よりの風に吹かれ湖上に静かなうねりをつくっていた。静かな中に豊かさと美しさを秘めたこの地方は、牧歌的で実にすばらしい生命の憩いの場所として最高である。このような所を好んで生活された大師の人柄が偲ばれて言い知れぬ幸福感に満たされる。大師の時代の人々は去っても野山の花々の息吹きある生命の火花は師の教えを今日にも伝えているがごとく、その波動はあたりに満ちており、訪れる人々をすっぽりと優しい愛のまなざしで包み続けている。

このような恩恵にあずかれたのも企画してくださった先生と田中さんのご尽力の賜であり、また参加されたみなさんの温かい調和に満ちたフィーリングの奉仕であるものと思います。限りない感謝の気持を申し上げます。

## エルサレムは待っていた

東京　磯目三鶴

二〇〇〇余年ぶりの日は落ちて、異国の丘の夜の城に、往時に輝いたイエスの顔が偲ばれる。

同行された皆様方、実にすばらしい旅行の思い出をありがとうございました。見るものすべてに歴史の重みを感じ、預言者の出現、そして戦乱に苛まれた民衆のざわめき声が、思わず手にした小石の中から響いてくるようでありました。

感動の第一場面はなんといっても見学一日目にバスをオリーブ山へ走らせて、そこからのエルサレム旧市街の眺めで、もううっとりと胸もふくらむ溜め息の連発です。またエルサレムを囲む外景の山々は素朴で、この眺めは私たちを待っていてくれたかのようでもありました。この時はあまり時間がもてませんで惜しむ気持だったのですが、あくる日も一番目にここへ来る願いがかないとてもうれしかったです。さぞかし皆さんもそう思っていたのかもしれませんね。どこを見てもエルサレムの褐色を帯びた町並みには目を見はらせるものがあり、新興住宅地もそのようで、ここで建築する家屋はみなこの国の岩石を使用しなければいけないと法で決められているとか。それは由緒あるエルサレムの町の美しさを保つのにいいことだと思われました。

行くところすばらしさの連続でしたが、エレオナ教会で榊原先生の説明にバプテスマのヨハネは民衆を神への門に入る準備をさせ、そしてイエスはいざ神の御霊へ導いたと。これを聞いたときまさしく、われらの先生のGAP活動のご苦労と各地方支部で活躍されている諸氏を思い胸熱い思いがしました。

金星人イエスにバンザイ！

## 安全な国イスラエル

神奈川県　千田光明

GAPで企画する旅行はいつも素晴ら

しく安全であると聞いていましたが、今回の「エルサレム宇宙考古学の旅」はとても素晴らしく、かつ印象に残るほどの旅行であったと思います。旅行と言っても何か異国の地に着いた感じはほとんど無く、親近感がありました。又、イスラエルの特に田舎の人達は日本人に対してとても友好的で珍しい様子でした。旅行の道中では空港等の警備は厳重でしたが、危険は全くなく、イスラエル国内は安全で、エル・サレムは平和な都でした。イスラエル国内を担当して下さった日本人でイスラエル国籍のツアーガイドさんや、アラブ人のバス運転手さんはとてもりっぱな方々でした。特にそのガイドさんは日本とイスラエルで神学を勉強なさった方でイスラエルにとても詳しい人であったので私達はとても恵まれていたようで幸運であったと思います。そして彼のおかげでしまっていた教会等の遺跡の内部に入ることができました。

イスラエルのテルアビブ到着の翌日から旧エルサレム市内の遺跡を見学し、当地に三泊しましたが、一週間ぐらい滞在したい気持でした。ここの遺跡を全部見て廻るには一カ月ぐらい滞在しないと無理であると言われるほどでした。教会内の遺跡を見てわかったことは教会内及びその付近には洞窟が多く、イエスと洞窟の関係が行って見て始めてわかりました。又、クムランの洞窟等は旧エルサレム市内の教会と何か違った感じでした。遺跡を案内して説明する時は、ガイドさんはほとんど聖書を持ってそれから引用していたのが印象的でした。又、どういうわけか予定外の場所にも多く行くことが出来ました。その他、イスラエル民族舞踊を見た人や踊った人、歌った人等様々でした。

最後に、この素晴らしい旅行を企画して下さいました久保田会長及び田中さんに心から御礼申し上げます。

## イエスの波動

茨城県　清水勝一

今回の旅行は私にとって重要なレッスンとなった。初めての海外旅行でもあり全てがかけがえのないものとなった。書きたい事が山ほどあり困ってしまう。とにかく高校時代にイエスを知り、社会の荒波にもまれるたびにイエスの苦しみを思い、どんなに助けられたかわかりません、（クリスチャンではありませんがイエスの教えと行為に感動しました）そしてユリゲラー、超能力、UFOに興味を持ち、GAPに入会し、アダムスキーの宇宙哲学を学びましたが、その中によくイエスの教えが宇宙的に解説されており、その深遠さにあらためてイエスの偉大さを知り、アダムスキーの洞察の深さを知ったのです。更にオーソンがイエス、アダムスキーがヨハネの生まれ変わりとの重要な情報を得（GAP会員になって良かった）、スペースプログラムの壮大さと、何とか地球を良くしようというスペースブラザーズの愛情を感じ、宇宙の英知の深遠さを感じるのです。そのような事で今回の旅行はスペースプログラムの重要な一場面を思い起こすには絶好のチャンスでした。イエスの歩いた道を歩きイエスの波動を全身に受けました。石も持ち帰りました。少しでもイエス、オーソン、アダムスキーに近づきたいために……。そして決してあきらめないスペースプログラムへの協力のために……。又身近に久保田先生の高貴な波動を受け、更にGAP会員諸氏の温かい波動に包まれほんとうに素晴らしい旅でした。とにかく出発前から色々の事、不思議な事があり、全部書きたいのですが字数が制限されており、これにてペンを置きます。最後に久保田先生、田中氏、石川氏、GAP会員諸氏そしてガイドの榊原氏に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 鶏鳴教会の鐘に感動

千葉県　遠藤昭則

イスラエルのベングリオン空港からエルサレムへ向かうバスの中で、

「二千年前にイエスが活動されていた所へ行けるんだ。早く見てみたい。どんな所なんだろう」

と期待に胸をふくらませていました。

エルサレム市街が見えて来た時には、

「ついに来たんだ！」

と思いました。土埃の舞うような感じの街ではあるけれども、何か暖かさ、そしていくらかの緊迫感もあるような、ちょっと一言では言えないような街でした。

鶏鳴教会の横にある、イエスが歩かれたという石段を見たら、目頭が急に熱くなってきてしまいました。

そしてそれから鶏鳴教会に入ったのですが、説明を聞いている時に、自分の身体の内部からこみあげてくるような感じがあって、目の前が曇ってしまいました。その後イエスが入れられたという牢を見ました。

そのようにして色々と見て、地上の教会の堂内に戻って来た時、丁度教会の鐘が鳴り出しました。それはそれはとても感動的なもので、イエスがいた所だという気持ちもあってか、涙が出てきてしまいました。私は他の人に見られては恥ずかしく、あわててサングラスをはめて涙を隠していました。そしてこの教会を出て嘆きの壁の近くへ行くまで、この感動が続いていました。

旅行に参加して本当によかったと思っています。まだまだ死海のことやクムランのこと等、たくさんの感想があるのですが、それらは今後の私の生活の何らかの支えになると思います。本当にどうもありがとうございました。

## 宇宙の法則と実践を確信

神奈川県　篠　芳史

今回の「エルサレム宇宙考古学の旅」に参加させていただき私自身大いなる成果を得ました事を大変喜び、日本GAP久保田会長、ワールドセブントラベル田中正氏、素晴らしいガイド榊原先生、バス運転手ミスター・ベニー、同室の井川博文氏はじめ参加された全員の方々に感謝とお礼を申し上げます。

今回の旅行にて確実に学び、又強調されることは、アダムスキーの著書の中でも述べられていることですが、イエスは宇宙の意識、英知及び生命力を教えよう

としていた事です。それは「生命の科学」第五課に書かれている通りです。しかし当時の多数の人々は結果の世界に心を奪われ真の教えを理解出来なかった様です。その結果、教会が宗教として、祈りの場所として今日残っている様子が良く分りました。しかしイエスの足跡をたどると、偉大なイエスがその深遠なる宇宙の法則を熱心に教え指導していた様子が本当に良く分りました。

私達はこの地球上で最高の教えを学んでいる事がこの旅行を通してあらためて確信出来ました。又、学ぶべき実践するべき多くの事がある事を強く感じ、これからの希望となりました。

私は初めての海外旅行ですが、今回の企画発表より暫くして「今、宇宙哲学を学んでいる自分には今回の旅行は是非必要な事だ。これからの実践の為にも必要な事だ」と思いそれ以来カラシ種ほどの疑惑もなく、カラシ種ほどの大きさの確実な信念のみで旅行参加に努力しました。

今回の旅行を通じて今迄にない力が湧いて来ました。皆様と共に過ごした十日間は一生の思い出となり進歩の糧となっております。皆様ありがとうございました。〝シャローム〟

## 機中よりUFOを目撃

北海道　坂野美津子

毎日が感動の連続といった旅でしたが、特に印象深い所としては、まずはベツレヘムの「牧者の野」です。

榊原先生が「ここはダビデ王が少年時代に羊を追ってかけめぐった山野で、四千年前とほとんど変わっていません」と言われたので、はっとして見上げたら、この野が何とも言えぬやさしさ、懐かしさで私の胸に迫ってきて、自然に涙が出てくるのです。

この野にあたたかく迎えられたような気がして、胸が一杯になりました。付近の「牧者の野礼拝堂」の三枚の壁画も宇宙的で、素晴らしいものでした。

それからサマリヤの「ヤコブの井戸」では、主イエスとサマリヤ女性との語り合いが人間味に富んでおり、又、宇宙の法則を宣べ伝えた処として高貴な感じも受け、静かで深い感動を受けました。ここで井戸の水を飲んだことは良き想い出となりました。この井戸のことは毎日想い出しています。

そのほかオリーブ山付近にも心ひかれるものがありました。特にベタニヤのラザロの教会や、マルタ、マリヤ、ラザロの三姉弟には何となく親近感がわきました。

そして、エリコからエルサレムへ帰る途中オリーブ山のどこの村なのかはわかりませんが、夢で見たことのあるような村を通りました。逆光にうかんだ黒っぽいこの村はたしかに見た感じがするのです。

最後に、二十日の夜、ローマ上空にさしかかる頃だったと思いますが、オレンジ色の球体三個位が下や左や右にジグザグに動いているのを見つけました。伊藤達夫さん、清水勝一さんとなおも見ていると、二つが一つになって平行になったりいろいろに動くのです。私はUFOだったと信じております。

まだ他にマサダの要塞、カナの教会、ユダヤの歌と踊り等、素晴らしい経験や想い出をたくさん与えられた心豊かな旅でした。

## 離れがたかったイスラエル

広島県　三浦公子

エルサレム宇宙考古学の旅への参加が何かのきっかけになればと思い申し込みました。始めから何もかもがスムーズにゆき少々驚いています。飛行機に乗るのが初めてなのでテルアビブ迄の二十時間余りは少々きつく、周りの方々にご迷惑をかけてしまいましたがとても親切にして頂きありがたく思いました。

エルサレムの最初の朝は早くも三時のコーランで目がさめてしまい緊張のためか眠気はどこかへいった様な一日でした。市内が一望できるオリーブ山、すぐ下のゲッセマネ庭園、そしてシオンの最後の晩餐の部屋。入って何気なく奥の黒ずんだ柱に触った時、すーっと涙が流れてしまいある思いが浮かんできました。皆さんと部屋を出た後も去りがたくまた戻って何枚かの写真を撮りました。皆さんそれぞれの想いを持ってこの部屋におられたのではと思いました。鶏鳴教会。人、人の中を遅れまいと歩いたビアドロローサ、聖墳墓教会、ゴルドンの丘等、そしてアラブのレストランでの昼食は珍しくておいしかったことも一つ一つが想い出されます。

翌日荒野を抜け死海に出た時の緑の鮮やかで美しかったこと。その死海では水の中を歩いて沖まで出たこと等も。住居跡の写真を撮るのももどかしく急いでバスに乗った感じのクムランでしたが、そこに何年かおられたであろうイエスと共に宇宙の法則を生かされた方々のフィーリングと生活は想像以上にすばらしかっただろうと思いました。

エルサレム最後のすばらしい雰囲気での夕食会。その後ハン劇場でのすばらしいショー、先生のGAP讃歌で一層盛り上がってとても楽しかった夜。そして荒れぎみのガリラヤ湖をテベリアからカペナウム迄。垂訓の山。よく見ないと誰だか分からなかった夜遅くまで続いた野外パーティー。今にもアダムスキー氏が出てこられそうな、思っていたよりも大きなサンピエトロ寺院の門。木々と建物が調和していてとても美しかったローマ。一つ一つが大切な想い出。もっとゆっくりしていたかったいくつかの場所。とても離れ難かったイスラエル。心が揺れ動いて何かとご迷惑をおかけしたことと思います。その中で思いやりのある素晴らしい方々との十日間は失っていたものをほんの少しですが見つけることができた様に思います。

素晴らしい旅を企画されました久保田先生、田中様、ユーモアを交えての素晴らしいガイドをして下さいました榊原先生、運転手の方、旅行された方々、お会いしたすべての方々に心よりお礼を申し上げます。

（以下次号）

# 大阪支部大会

●七月十七日（日）
●吹田市民会館（大阪府吹田市）
●出席者　四十五名

初夏の七月に本年も盛大に大阪支部大会が開催されました。久保田会長は、前日の十六日夕刻新幹線で新大阪駅に会員数名が出迎える中、無事に着かれ、約十カ月ぶりの再会となり、いよいよ大会が始まったという実感が伝わって来るようでした。早速、宿舎のホテルへチェックインの後、久保田会長を囲んで、会員有志による大会の成功を前祝いして夕食会が催され、支部大会に向けて一段ともりあがりました。

明くれば十七日、いよいよ大会当日となりました。会場の吹田市民会館では支部役員が準備万端を整え、いよいよ午前十時大会の幕明けとなる。今年の司会者は昨年と同様、一段と磨きのかかった長浜富春氏の軽快なあいさつから始まり、続いて大阪支部代表の平塚和義氏のあいさつが続く。午前中は、昨年のヨーロッパエジプト宇宙考古学の旅の記録映画を上映、これは毎年おなじみの大阪支部の斎藤康美氏の撮影で、また久保田会長の解説入りの迫力あるサウンド映画です。昼食休憩の後、会員の体験発表に移り、年配ながら非常に熱心な会員でいらっしゃる田中邦安氏が、自然の観察と題して発表された。氏はとても虚謙な、柔和なお人柄で、自然界の小さなことを観察されたことを中心に話されました。引きつづき、今大会のメインである久保田会長のご講演、「宇宙の法則とは何か」と題してご講演されました。その中で宇宙の法則とは一つの統合された、全宇宙に存在している力であり、また宇宙は調和に満ちていることや、自分自身を太陽にたとえて、万物を祝福することの重要さを強調され、それを実践するためには、四感のコントロールも大切であるとのことでした。その後質疑応答、予定どおり五時に終了し、六時半より市内のホテルにて夕食会が盛大に開催され、特に今回はアダムスキー全集第一巻発行記念パーティーとしてとても意義深い夕食会でした。

大会翌日は緑豊かな万博記念公園内を散索し、また民族博物館なども見学し、楽しく有意義なGAPホリデイをすごし、無事夕方の新幹線で会長をお送りしました。今回の大会は非常に次元が高く、又会長のGAP活動とか、真の方向性を具体的に示して下さったすばらしいものでした。

皆様に深く感謝します。（仲間秀樹）

# 第1回　秋田支部大会

●八月二十八日（日）
●弥高会館（秋田市）
●出席者三十六名

前日の二十七日午後三時過ぎ、私、白川氏、伊藤氏の三名で久保田会長を迎えるために秋田空港へ行った。フィーリングとしては大宇宙株式会社の会長を待つ秘書のようだと白川氏とヒソヒソ話しているうち会長御到着。ついこの間エルサレム宇宙考古学の旅の大任を果たして帰国されたばかりだからだいぶ疲れているのではないかと思いきや、なんと二十歳そこそこにハツラツとしている。懐しいやらうれしいやら。秋田パークホテルで歓迎夕食会を開催。

翌二十八日初めての秋田支部大会を開く。伊藤正治氏の司会と私の挨拶の後、秋田支部生みの親、佐々木三羊子さんのすばらしい体験発表後、会長の「UFO問題と宇宙哲学」と題しての御講演が始まる。力強い上にエルサレムの貴重な話がポンポン出る。どうやら会長は金星人イエスの強力なパワーを十二分に充電してきたようだ。とにかくすごい。つまるところは自分自身で良きカルマを作り、良き運命にするのだと結ぶ。その後全員自己紹介、質疑応答などで盛況裡に終了。

夕方六時すぎより隣室でアダムスキー全集発刊記念をかねて夕食会が白川裕基氏の司会で行われ、佐々木三羊子さんと東京の松本隆司氏との婚約発表もあり、カラオケや何やらで歓声と拍手の渦巻くなかを楽しく終了。

翌日は男鹿半島周遊ドライブに出かけたが、朝から土砂降りの雨。ところがなんと船川港あたりで奇跡的に晴れてきた。一日中雨という予報だったので不思議な現象である。会長の行く所必ず晴れるそうだが、全く本当だ！

初めての大会でしたので至らなかったところが沢山目につきましたが、これも今後のレッスンとして支部一同もっともっと精進するつもりです。開催にあたって絶大なご支援をたまわった会長はじめ新潟と全国の会員の皆様、支部一同心からお礼を申し上げます。（佐藤春雄）

## 大成功の大阪支部大会

兵庫県　仲間秀樹

先日先生御来阪の節は天候もむし暑かった三日間でしたが、何とか天候にも恵まれ、無事に大会も大成功裡に終わりまして本当にありがとうございました。

昨日先生を新大阪のプラットホームで見送りました際には全員が飛び上がって思わず「バンザイ！」と叫び、本当に今回の大会が成功であったことを喜び合いました。その帰りに少し休んで大会の収獲を話しましたが、ほとんどの感想は、昨年にくらべて次元の高いフィーリングであったことや、また平塚さんの言葉を借りれば、「これほど皆さんが協力してくれるとは予想外だった」と大変喜んでおられました。

私見ですが今回の大会を契機にして、何か良き方向へむかって前進して行く印象を受けました。また人数は決してふえてゆくとは感じられませんが、次第に次元が高まり、賢明な判断で前進するものと思います。

大阪支部はさまざまなことがありましたし、現在もありますが、一つの方向に行けば先は開けてくると思います。大会での先生のご講演を文章化して冊子にする件は平塚さんにも相談した結果、賛成して頂いていますので、先生に原稿を見て頂き、加筆訂正して下さるということでよろしくお願い致します。

それでは次回の機関誌を心から期待し、毎日のご活躍をお祈り致します。たいへんありがとうございました。

## ＵＦＯ目撃記

千葉県　遠藤昭則

静岡支部大会では貴重な御講演を拝聴させていただき、とても感謝しています。先生の語られる言葉の中に私にとって勇気を起こさせてくれるものが沢山ありました。

先生がＵＦＯの観測――と言ってよいのでしょうか、スペース・ブラザーズの歓迎と言った方がよいのかもしれませんが――をなさるときに思念される言葉として、

「偉大な惑星からいらっしゃった兄弟の方々。久保田八郎がお迎えにまいりました。スペース・プログラムの遂行のために、なにとぞ私をお使い下さい。私を御指導下さいませ」

と言われましたが、私もそれを聞いていまして、よし、私もスペース・ブラザーズにこちらから呼びかけなくてはと思いました。

そして五月八日の夕方、久しぶりに散歩をしていて、ふと空を見上げますと、西の空に金星が出ていました。そこで金星に想念を送ったら金星の人々のうちのだれかが気付いてくれるかな、などと思いながら、

「金星の人々は愛の法則のもとに生きているのだ。地球の兄弟が愛の法則で生活できるように、私が地球の兄弟に奉仕できるように、宇宙の兄弟の方々にお会いしたい」

と思念してみました。

そうして二、三分歩いた頃でしょうか、本当はどこからきたフィーリングかわかりませんが、まるで金星から送られてきたように、その方向から金色っぽい色が見えるようで、そして私の身体もそういうフィーリングに包まれていました。

翌日の九日（火）、昨日のそのようなことも忘れて学校で授業をしていました。たぶん朝の十時頃だったと思います。生徒に問題を解かせていて、何の気なしにベランダに出て下を見ていました。下では工事用の機械がうるさい音をたてながら動いていました。そして顔を上げて東の空を見ますと、そこに横に細長い形の物がありました。白色で、静止しています。「飛行機かもしれないな。でも飛行機だったら翼があるからな」などと思っておりましたら、その物体は九十度向きを変えてこちらを向いてくれました。円形の中心は黒っぽい色をして周囲は白色でした。明らかに金属製の物体の感じがしましたので、母船だな、と思うと同時に「どうしよう、このあと、どうしたらいいんだろう」とあわててしまいました。それで生徒にはあと三分と言ってから再びベランダに出て見ましたら、物体はその位置でだんだんと見えなくなってしまいました。

三中にいたときもＵＦＯらしい物をよく見ました。六年位前、新卒二年目のときに、私の受持ちの三年のクラスで話をしていて、ちょっと東京湾の方を見てみましたら、真っ黒な物体だったと思いますが、それが飛んでいました。そのことを生徒達に言ってまた見ましたら、その物体が一つだったのが、二つになったのです。つまり一つの物から分裂して二つになって飛んだのです。でも遠くのことですから二機のヘリコプターがそのように見えたのかもしれません。

二回目は以前お知らせしましたように、数年前の総会の次の日、学校の理科室で白いフォース・フィールドに包まれている丸いＵＦＯを見ました。

三回目は去年のことですが、午後のクラブの時間に私がある事で困っていたときですが、雲と雲の間を窓のある細長い物体が飛んで行ったので、とても勇気づけられました。翼は見えませんでした。

最後に四回目は今年ですが、ある問題で学校にテレビや新聞の取材陣が来たときのことです。「これだけの取材陣が来るのなら、ＵＦＯも上空から見ているかもしれないな」と、「勤め先の学校を変えようかな」などと思っていました。

そして夕方、校舎の三階から東の方の空を見ると、白くて細長い物が飛んでいました。でもかなり遠いし、直線的に飛んでいるので、飛行機かヘリコプターだろうと思って見ていましたら、遠くに雲が見えている所まで来て消えてしまいました。雲との間の距離はかなりあったと思いますので、雲に入って見えなくなったのとは違うと思います。

これを見てから四中へ移動する意志を持ったのです。今四中にいますが、こちらへ来て本当に良かったと思います。

大学の頃まで天体観測をしていたので、最近もよく星を見るようにしています。昔一度、天体観測をしていた私と弟の頭上にＵＦＯらしい光点が飛んで来て、静止し、弟がカメラを持って来たらまた動き出したことがあったので、また飛んで来てくれたらいいな、などと甘い考えを起こしながら空を見ています。

## 真の死者の証言はない

長野県　宮下かづえ

近頃は〝あの世（霊界）〟に関する書物がだいぶ出回っていますが、最近は俳優のＴさんが何冊か出したようです。くわしくは知りませんが、恐怖心を起こさせるようなものではないようです。一般には〝あの世〟の存在を信じている人や信じたい人がかなり大勢いると思います。したがってあのような書物はかなりの影響を及ぼすのではないかと思います。

わがＧＡＰは〝あの世〟の存在を否定する立場上、なぜ存在しないのか、また〝天国〟の証言者が見たものや現象は本当は何だったのか等、くわしく科学的に説明する義務があると思うのですが――。もちろんアダムスキー氏の著書を読めば理解できることですが――。本誌80号のコズミック・ポストに投稿なさっている北海道の山崎泰照さんの体験や記憶は大変示唆に富み、貴重なものだと思います。転生時の記憶を持つ人がもっと沢山出現してくれたら心強いですね。私は全くダメです。

〝あの世〟の証言者はほとんどが一度死んでから再び生き返った人々の話であり、本当に死んでしまった人からの証言はないようですね。こ

こが興味深いところです。かのゲーテやスエーデンボルグも〝天国〟に行って来たことになっているようですね。先生のご意見をお聞かせ下さい。

## 人間はなぜ存在するのか

広島市　下本　滋

久保田先生、この前は母の病気の手当ての仕方を教えて下さって本当にありがとうございました。おかげで医者も見離したヤケドもみるみるうちに回復し、現在ではほぼ治っています。本当にありがとうございました。深謝します。

以前の手紙にありました人間が宇宙に存在する理由ですが、わかりました！

無限の宇宙の中で私たち人間が進化し続ける理由は何なのでしょう。直接的には進化の法則の現れです。私たちが進化し続けているのは宇宙の創成以来の一定の流れの中に組み込まれているからなのでしょう。宇宙の一部である我々人間の存在する意味を問うことは終極的に宇宙が存在する意味を問うことにならざるを得ないと思うのです。人間の存在意義は宇宙の創造本来の役割を果たすことにあると思います。

## ●文通を

GAPの皆様こんにちは。私は今年の三月からぬいぐるみミュージカル劇団「飛行船」で小道具の仕事をしています。東京に出て来て一年、そろそろアルバイト生活は終わりにして、だれが見ても申し分のない社会人になろうと決心した矢先、「飛行船」で働いてみないかと言われ、動揺し、悩みましたが、思いがけなかっただけに偶然ではないのだろうと思って入ってみました。「飛行船」は三つの班があり、私のついた所は一番ベテランぞろいの班なのでたいへんですが、みんないい方ばかりで楽しく、また学ぶことも多くあります。地方公演も多いので全国の会員の皆様と親睦を深めることができたらいいなァと思っております。十月頃からは新作の孫悟空になると思います。ごらんになった方は感想をお聞かせ下さい。

〒160 東京都新宿区大久保2-25-13、わかば荘7号　橋本弘美

福山市及び広島県内の会員の方、一緒に勉強しましょう。文通を望みます。

〒720 広島県福山市木之庄町616の4、向陽寮内　平井　渉

## 大宇宙が味方

三重県　松口幸之助

アダムスキー全集第一巻「宇宙からの訪問者」を今読んでおります。写真が二十点ありますが、これら一枚一枚が意義の深いものがあると思います。特に一枚目にスカウト・シップの写真が大きく載っています。イメージを描いてみると目前にドーンとせまるものがあります。

一般の人々はなにか淋しそうにしていると感じます。それを当然のように思っています。先生が言っている「大宇宙が味方」は励まされます。先生もご苦労なさったと思いますが、アダムスキー哲学によってここまでGAPが発展したのだとこの頃つくづく思います。お元気で。

**●おめでた** 神奈川県の会員・千田光明氏は来たる十一月十三日に山形県新庄市仁田山82の柴田文子さんと、入り婿として同市で結婚の予定。

## 昭和59年度地方支部大会の予定

- 3月18日(日)＝松山支部大会(松山市)。
- 4月29日　(連休初日)＝静岡支部大会（中伊豆方面のホテル)。翌日は伊豆半島周遊。
- 6月10日(日曜)＝群馬支部大会(太田市)。翌日は日光へ観光。
- 6月24日(日)＝仙台・山形合同支部大会(仙台市)。
- 7月28日(土曜夕方)＝新潟支部大会（湯之谷村温泉旅館)。翌日は奥只見へ観光。

※詳細は次号より 順次掲載。

## 〈予告〉今年度地方支部大会

### 創立記念　福岡支部大会

| | |
|---|---|
| 日時 | 昭和58年11月20日(日)<br>午後1：00→5：00 |
| 会場 | 「福岡市民会館」2FA会議室<br>福岡市中央区天神5丁目1－23<br>☎ 092－761－6567<br>須崎公園の中。県文化会館の向かい側。 |
| 会費 | ¥2000（全員記念写真は送料共¥700。グランドキャビネ判） |
| プログラム | 1：00　支部代表挨拶　島津紳二郎<br>1：05　会員講演・樋口美由紀「育児と宇宙哲学」<br>1：35　講演「アダムスキー問題の見直し」久保田八郎先生<br>1：35　記念写真撮影・休憩<br>2：00　全員自己紹介・質疑応答<br>5：00　閉会<br>※久保田先生を囲んで徹底的な話し合いの会とします。どしどし質問を出して下さい。 |
| 夕食会 | 大会終了後 6：00→8：00に中洲川端通りの福寿飯店（北京料理）で夕食会を開催。　会費¥4000<br>※立食ではなく数台の円卓を囲んで座る方式。 |
| 宿舎 | 「グリーンホテル」をお世話します。<br>シングル　1泊¥4100<br>ツイン　1泊¥6600<br>※ホテルは博多駅の裏側の「筑紫口」を出て左へスグ。徒歩2分。 |
| 申込 | 夕食会出席と宿舎希望の方は大会前日までにハガキで下記へお申込下さい。<br>〒813 福岡市東区香椎駅前1－19－28　大村ビル405<br>島津紳二郎<br>☎（092）672－6784 |
| 備考 | 大会翌日は特に観光をやりませんが、久保田先生と希望者とで市内を散策します。希望者は大会当日島津まで申し出て下さい。 |


だれにもわかる「生命の科学」1982年版
第3部刊行中！

1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録。深い理解を得るための必読の名著です。

B6版　活字タイプオフセット印刷
7～9月分　頒価500円　送料170円

申込先　〒980 仙台市五輪2丁目9-8(2F南) 安藤澄雄
☎（0222）91－7978　振替 仙台7-30019
※第1部（¥700)、第2部（500）在庫あり。
送料¥170。3冊一括注文の場合送料¥250。

食事・入浴その他のマナーについて（改訂版）
日本GAP会長・久保田八郎執筆
毎年GAPで実施する海外研修旅行の参加者に配布するテキストを希望者に頒布します。ほとんどの日本人が間違えている洋食の食べ方、特にナイフとフォークの使い方その他や、西洋式風呂の入り方を図解で詳述した宝石のように光る解説書。これをマスターすれば国際的に通用する紳士淑女になれる。GAP会員必読。希望者は60円切手5枚同封、日本GAP宛お申込下さい。

絶賛発売中！

## ジョージ・アダムスキー全集

B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

久保田八郎訳　全７巻
徹底的全面改訳決定版

**第１期〔第１巻・第２巻・第３巻〕完結！**

第１巻 **宇宙からの訪問者** 338頁　￥2500　〒250

第２巻 **UFO問題の真相** 262頁　￥2500　〒250

第３巻 **UFOとアダムスキー** 352頁　￥2500　〒250
（11月上旬配本）

■第１期分３冊セット特別価格　￥7000（送料共）

ジョージ・アダムスキーの体験は真実であった！ アメリカの科学ジャーナリスト、ウィリアム. L. ブライアン氏が著書「ムーンゲート」で米航空宇宙局が隠蔽した月面の驚異的事実を暴露して一躍アダムスキーは再浮上した。偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集こそは、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針である。UFO研究家、宇宙哲学探究者必携の名著。

**第２期〔第４巻・第５巻・第６巻・第７巻〕予約注文受付中**

第４巻 **宇宙哲学** ￥1300　第５巻 **テレパシー開発法** ￥1800

第６巻 **生命の科学** ￥1800　第７巻 **アダムスキー論説集** ￥1800

■第２期分４冊セット特別価格　￥6000（送料共）

※上記の第１期分と第２期分の各セット特別価格は発行所宛直接注文の場合に限ります。１冊注文の場合、送料は発行所負担。郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林　〒162 東京都新宿区榎町33　Tel. 03(267)6920　振替 東京4-2521

■日本GAP企画第６回海外研修旅行

## 第2次「エルサレム宇宙考古学の旅」

圧倒的な感動と歓喜の旅であった58年度の「エルサレム宇宙考古学の旅」の素晴らしさを再度満喫して頂くために、多数の方の要望にこたえて59年８月に第２次のイスラエル行きを企画しました。エルサレムを中心にイエス関係の遺跡を訪ねながら第１次の旅と大体同じコースをたどり、そのあとはスイスへ入国してルツェルン経由インターラーケンを経てさらに登山電車で美しいグリンデルヴァルト村へ登り、ここに宿泊して夢のようなスイスアルプスを望見します。帰途はルツェルンに宿泊しますので、スイス滞在は２泊３日となります。またオプション（希望者だけ）により登山電車で名峰ユングフラウにも登って大自然の美を観賞します。航空機はチューリッヒ経由のスイス航空ジャンボを利用。費用は￥498,000。（ただしユングフラウ登山は別途料金約￥10,000）。詳細は別紙案内書をごらん下さい。ハガキで下記へお申し込み下さればお送りします。

●案内書申込先　ワールドセブントラベル株式会社　田中 正
〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル2F Tel. (03)499－2461

# 日本ＧＡＰ全国月例研究会案内

| 支部名 | 日　　時 | 会　　場 | 会費 | 携行品・行事 |
|---|---|---|---|---|
| 東京本部 | 毎月第１土曜日<br>午後２：00→６：30<br>**※12月のみ第３土曜日（17日）に変更。１月月例会終了後新年会を開催。会費¥2800** | 上野公園内「東京文化会館」４階会議室。☎03－828－2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 | ¥ 300 | ２：00→３：00会員による体験講演。<br>３：00→４：30久保田会長の「宇宙哲学」講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。<br>４：30→６：30自己紹介，意見発表，質疑応答。<br>※59年度は「宇宙からの訪問者」を解説するのでテキスト持参のこと。各支部も同様。 |
| 大阪支部 | 毎月第３日曜日<br>午後１：00→５：00 | 大阪府吹田市出口町４丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。<br>国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎ 06－436－3478 | ¥ 200 | テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」（文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会 |
| 新潟支部 | 毎月第４日曜日<br>午後１：00→５：00 | 新潟駅前「青年の家」☎0252－44－6766<br>連絡先＝星富治夫　☎02579－２－5562 | ¥ 200 | テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。 |
| 福岡支部 | 毎月第３日曜日<br>午後１：00→５：00 | 福岡市天神町５丁目１－23「福岡市民会館」３Ｆ　国際会議控室<br>連絡先＝島津紳二郎　☎ 092-672-6784 | ¥ 200 | テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」「文久書林）を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。 |
| 名古屋支部 | 毎月第２日曜日<br>午後１：00→４：30<br>**11月は第１日曜（６日）に変更。59年１月は第３日曜（15日）に変更。** | 名古屋市中区古沢町７－１「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331－2141<br>国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩５分。<br>連絡先＝林　国宣　☎ 0586－45－6468<br>武田充弘　☎ 052－622－7339 | ¥ 300 | テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表テレパシー練習，座談会。 |
| 仙台支部 | 毎月第４日曜日<br>午後１：10→４：20 | 仙台市「市民会館」会議室（西公園内）<br>連絡先＝笠原弘可　☎0222－95－0725 | ¥ 200 | 東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。 |
| 山形支部 | 毎月第１日曜日<br>午後１：00→５：00<br>**※59年１月のみは第２日曜日（８日）に変更。** | 山形市小白川町「社会福祉センター」<br>山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩３分。☎ 0236－42－5181<br>連絡先＝清水　正　☎ 0238－21－5441 | ¥ 200 | テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。 |
| 札幌支部 | 毎月第１日曜日<br>午後１：00→４：30<br>**※59年１月のみは第２日曜日（８日）に変更。** | 中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011－241－9171　連絡先＝伊藤重信　☎011－742－0192 | ¥ 500 | テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開，テレパシー練習，座談会。 |
| 静岡支部 | 毎月第１日曜日<br>午後１：00→５：00　　５ | プラザー静岡ビル８階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町９－１<br>連絡先＝野口敏治　☎0542－86－7729 | ¥ 200 | テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。 |
| 旭川支部 | 毎月第４日曜日<br>午後１：00→５：00 | 旭川市６条通４丁目「勤労者福祉会館」２Ｆ小会議室　☎ 0166－26－1304<br>連絡先＝阿部　堯<br>☎ 01658－２－1585 | ¥ 500 | 東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。質疑応答，テレパシー練習，研究発表。 |
| 松山支部 | 毎月第４日曜日<br>午後１：00→５：00<br>**※奇数月は広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」５Ｆ会議室。<br>※偶数月は松山市民会館会議室。** | 松山市民会館会議室<br>連絡先＝伊藤達夫　☎ 0898－22－3060 | ¥ 200 | テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。 |
| 群馬支部 | 毎月第２日曜日<br>午後２：00→６：00<br>**※12月10日(日)は夕方７時より那須温泉「ホテル愛寿」で忘年会。翌日同ホテルで月例会。会長ご出席。会費¥13,000細目照会のこと** | 群馬県太田市「太田市民会館」<br>第６会議室。連絡先＝久保寺信一<br>店＝0276－25－5985<br>自宅＝☎0276－45－3544 | ¥ 200 | 東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。 |
| 青森支部 | 毎月第３日曜日<br>午後１：00→５：00 | 青森市松原「青森市民文化センター」<br>教養室(2)　☎ 0177－34－0163<br>連絡先＝中根　豊　☎ 01756－３－3386 | | テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表，座談会。 |
| 沖縄支部 | 毎月第３日曜日<br>午後１：00→６：00 | 〒901-22　宜野湾市野嵩1547　マキシアパート　新里方<br>連絡先＝新里義雄<br>☎ 09889－３－3695 | ¥ 500 | テキストとして「宇宙哲学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介。座談会等。 |
| 秋田支部 | 毎月第２日曜日<br>午後１：00→５：00 | 秋田市八橋運動公園１－２「中央公民館」趣味の間。☎ 0188－24－5377<br>連絡先＝伊藤正治　☎ 0188－62－2831 | ¥ 200 | テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。 |
| 神奈川支部 | 毎月第３日曜日<br>午後１：00→５：00 | 神奈川県川崎市川崎区富士見２－５－２「川崎市立労働会館」第１研修室<br>☎ 044－222－4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前<br>連絡先＝大崎孝典　☎ 0492－65－0389 | ¥ 400 | テキストとして「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表，座談会等。 |

## ★本誌バックナンバー（旧号）★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

**No.79** 主要記事「イエスの聖骸布の謎」久保田八郎／「聖書とUFO」G.アダムスキー／「宇宙と愛について」(3)／「円盤につきまとわれた日」／「謎の巨石と太陽円盤の国へ」その他有益な記事を満載。

**No.80** 主要記事「ファティマの大UFO事件」久保田八郎／「美しき惑星の思い出」中川真理子／「GAPの意義・アダムスキーの著書」／「聖書とUFO(2)」G.アダムスキー／82年度日本GAP総会賛歌・講演録 その他。

**No.81** 主要記事「月はUFOの基地!?」久保田八郎／「私は異星人に守られている」岩崎敏夫／「美しき惑星の思い出(2)」中川真理子／「形而上学，心霊学，宗教」G.アダムスキー／「〈改訳〉テレパシー開発法」G.アダムスキー／その他

**No.82** 主要記事「静岡に頻出するUFO」野口敏治／「沖縄に出現した宇宙人」新里義雄／「スペースプログラムへの協力と宇宙的成長」伊藤達夫／「転生とカルマ」久保田八郎／改訳「テレパシー開発法」(2) G.アダムスキー／その他。

各￥700。※バックナンバーに限り送料は不要

### 「宇宙哲学」解説講義録音テープ

昭和58年度東京月例研究会において1月より毎月1～2章ずつ久保田会長が解説される録音テープです。アダムスキー哲学の理解を深める上の最重要な資料。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。各支部必須のテープ。

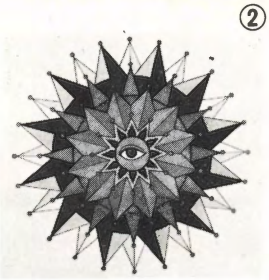
**テープ1本（90分） ￥1000 〒200**

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい（58年1月より毎月録音 第1章より在庫）。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502／振替名古屋7-51065

①

②



### ①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。（キャビネ判）（カラー写真）

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。（サービス判）（カラー）

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥500〒120 ②￥200〒60一括注文の場合〒120

### ③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。品切れ

### ④テレパシー練習用 ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
美麗箱入り。
￥500 〒120

日本GAP

## 編集後記

★本号より本誌の題号を変更しました。従来の「宇宙哲学とUFO」では非常に固い感じがして書店に出しても敬遠され気味なので、まずは当世の流儀で横文字にしたしだいです。「UFOコンタクティー」とはUFOと接触した人という意味で、直接的にはG・アダムスキーを意味しますが、間接的にはUFOやスペース・ブラザーズとのコンタクトを願うGAP会員全体をあらわします。略称は「UFOコン」です。内容は従来どおり宇宙哲学とUFOの専門誌ですから引き続きご愛読の程をお願いします。

★本号からウィリアム・L・ブライアン氏の「ムーンゲート」の連載を開始しました。アダムスキー派の旗手として躍り出た著者にたいし訳者は交流を始めており、新たな友情が芽生えようとしています。ご期待下さい。

★遠藤昭則氏のオーラに関する記事も興味深い内容です。氏はオーラで他人の人格が判別できますが、ただし差別はしないとのこと。しかも他人の個々のオーラについてはほとんど沈黙を守ってきました。ここが氏の偉いところです。

★今夏八月に実施の「エルサレム宇宙考古学の旅」は大成功でした。実際、これほど素晴らしかった旅は他にありません。編者の記事でその素晴らしさの百分の一でも伝わりますかどうか――。とにかく書いてみましたので、お読み下さい。なお39頁の予告どおり、五十九年八月にも第二次「エルサレム宇宙考古学の旅」を実施しますから、第一次に参加できなかった方はぜひご参加下さい。確実に感動されることを保証します。

★アダムスキー全集も着々と刊行が続きます。十月末には第三巻が出る予定です。全巻をそろえて通読されれば、またもあの壮大な宇宙ドラマが展開し、人間と大宇宙との深遠な関係にあらためて瞠目されるでしょう。

★神奈川支部は代表の千田光明氏が結婚移住のため十月の総会後は大崎孝典氏（川越市）に代表を交替。秋田支部も十一月十三日より佐藤春雄氏から伊藤正治氏にバトン渡し。ご両人ともご苦労さまでした。

★先号の折込チラシによる寄付金のお願いにたいして九月末現在で二百万五百五十円に達しました。ご厚志に衷心より御礼を申し上げます。紙面の都合によりご芳名は掲載できませんが、すべて記録してあります。

★**原稿募集** 本誌は読者の皆様から原稿を募集しています。UFO目撃、宇宙哲学の実践、宇宙的な不思議な体験、その他の論説の記事をお寄せ下さい。原稿は四百字詰原稿用紙を使用、ペン書き（エンピツ、ボールペンは不可）、一行を十八字にしてタテ書きとし、十枚以上四十枚まで。匿名やペンネームは自由ですが、必ず住所と本名を明記して下さい。採用分には薄謝を呈します。

★本誌の書店卸し協力者を募っています。本誌は営利事業でないために取次を通さず、約八十名の会員の方により都内と地方の書店に直接卸されています。協力希望の方はハガキでお申し出下さい。説明書をお送りします。

★**十二月の東京月例会のみは会館側の事情で第一土曜日から第三土曜（十七日）に変更します。**来年一月の月例会終了後は恒例の新年会を開催します。会費二八〇〇円。（K）

## 会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

―日本GAP―

日本GAP機関誌・季刊 冬季号
UFO contactee 83号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365―818
TEL（03）651-0958
振替東京4-35912
一九八三年十月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円

¥700